英国春秋

２０１８年春号
ISSUE NO 32
発行　英国日本人会

はじめに

とうとう春の到来！
特にあの大雪の後にやって来た春をいつもより喜ばしい思いで迎えています。“春の雪”と言えば何となく情緒がありそうですが、実際、交通機関ストップ、道路渋滞、学校閉鎖、断水その他もろもろの被害をもたらしましたので、音もなく降り注ぐのをうっとうしい思いで眺めやったものでした。既に咲き出していた寒桜が気にかかり様子を見に行きましたら、一面雪に覆われた森の片隅に、ひっそりと白い花を咲かせていました。その健気なそれでいて毅然とした姿に、思わず「枯れないで！」と声をかけてやりたくなりました。今、沈丁花やミモザの花々も雪枯れもせず咲き続けているのを嬉しい思いで眺めています。

春と云えば、今年は女性の春「イギリス女性参政権１００年目」にあたるそうです。そのためでしょうか新聞、テレビでサフラジェット（suffragette）の映画やそれに関する活動記事が相次いで取り上げられていました。彼女らの命を懸けての闘争記録を知るたびに、その権利を放棄している私自身を顧みて、少々後ろめたく感じています。日本の政治家の活動状況が分からないから・・・なんてはインターネットの普及している昨今、投票を棄権する理由にはなりませんね。因みに女性参政権獲得年はニュージーランドが一番早く１８９３年、英国、ドイツ、ポーランドが 1918 年、日本は 1945 年だそうです。戦後にやっと獲得されたとはいえ、大正時代からその動きはあったとのことです。

それやこれも含め今年は女性問題が何かと話題になっているようです。ＢＢＣ放送局では男女の賃金不平等の是正が叫ばれ、ハリウッドでは長年、女性を不当な扱いで卑しめたと某プロジューサーが糾弾され、裁判に持ち込まれるそうです。以前から叫ばれているＦＧＭもまだまだ全廃には至らず、家庭内暴力、名誉殺人（honour killing）、現代版奴隷の存在など解決すべき問題がやま積みのようです。我々一人一人が問題意識を持つのはもちろん大切なことでしょうが、これはやはりまず初めに“投票権行使”で良い政治家を選ぶのが我々の義務なのかも知れませんね。

『英国春秋』春号 No.32 の完成。原稿締切日以前は「十分なエッセイが集まるのか」と少々不安の態でしたが、ふたを開ければ興味深い文章が次々と到着、おかげさまで宝を満載した宝船の無事出航が実現いたしました。春号のために時間を割いて下さった会員の皆様、そしてご公務・療治等でお忙しい中、特別にご寄稿いただきました御三方にも、心よりお礼申し上げます。
今後も引き続き皆様のご支援を宜しくお願いいたします。

特別寄稿

宇山秀樹氏　（　在英国日本国大使館　総括公使兼総領事　）

小谷信行氏　（　医学博士、ジャパングリーンメディカルセンター院長 ）

竹内誠治氏　（　在英国日本国大使館　参事官領事　）

（アイウエオ順）

＊　＊　＊　　もくじ　　＊　＊　＊

はじめに		２
私からの一言　「普段の心掛け」	加藤節雄	４～　５
私は誰？	飯塚忠治	５～　６
水の都ロンドン	渡邊道英	７
巨匠メンゲルブルクの芸術に魅せられて	宇山秀樹	８～１０
近頃私のはまっていること	田村陽子	１１
英国春秋歌壇　　三十一文字に寄せて伝えむ	バロー典子	１２
英国春秋俳壇　　寒月	エリオットつや子	１３
２．５次元について思うこと	渡邊伸吾	１４～１５
ルチアとサロメ　ー狂乱の場ー	小川のり子	１６～１８
英国春秋つれづれに　　「私の目を消されてもいい」		１８
東京ガールズ・縁	石山望	１９～２１
紙切り芸人（シルエット切り）	ビドル惠	２２～２５
人生 100 年時代の医療について	小谷信行	２５～２７
英国春秋つれづれに　　「春の朝」		２７
英国春秋俳壇　　春を待つ	クーパー矩子	２８
英国春秋俳壇　　春のうた	俳句同好会	２９
シドニーでの領事業務とは	竹内誠治	３０～３２
ピンチャン・オリンピックを見ながら考えた	渡邊道英	３３～３４
英国春秋あれこれ　もう一つ日本の誇れるものー大塚国際美術館		３５

私からの一言「普段の心掛け」

加藤節雄

最近になって、ジャーナリストとかカメラマンという職業は歴史を刻んでいるのだと思い知らされている。「何を今さら分かり切っていることを言うのか」とおしかりを受けそうだが、特に最近になって、そのことをリマインドさせる様な事が続けて起こった。

まず第 1 はカズオ・イシグロ氏のノーベル賞受賞である。私は第 2 作目の「浮世の画家」を書いたばかりのイシグロ氏を取材し写真を撮影した。直後に日本の新聞や雑誌からも取材要請が来て、氏の家を訪ねたり、また彼が奥さんとともに我が家に訪れたこともある。イーストアングリア大学の講演の取材もした。当時はかなり付き合いがあったと言ってよいだろう。しかしそれから 30 年、付き合いは次第に薄れコンタクトは無くなってしまった。その後、彼はブッカー賞を取り、今回のノーベル賞である。大物になってしまった今では、気軽に電話をして会いたいというわけにもいかなくなってしまった。

ところが 30 年前に撮影した写真は希少価値があり、日本のメデイアが使わせてほしいと言ってきた。自宅の台所でお茶を入れている写真や、庭いじりをしている写真、タイプライターに向かって執筆している写真等が若き日のカズオ・イシグロ氏として、当時イシグロ氏に会った私の印象記とともに日本の新聞に配信された。

来年には現在の天皇が退位し、現在の皇太子が天皇に即位する。私は皇太子がオックスフォード留学時代に入学式から留学を終えコンコルド機でアメリカへ旅立つまでの 2 年間の間にかなりの取材をしている。撮影した写真も数千枚に及ぶ。頻繁に取材に訪れるので、皇太子とは顔見知りになり、口を聞く様にもなった。もちろん、日本に帰ってからは簡単に会うこともかなわず、その後はご無沙汰となってしまっているが、ここにきて日本のテレビ局から天皇即位の際に特集番組を組みたいので、留学時代の写真を使わせてほしいという注文が舞い込んでいる。

私は 1978 年にイギリス人陶芸家のバーナード・リーチ氏の取材をしている。晩年のリーチは独りでコーンウォールのセント・アイブスの海岸沿いのタウンフラットに住んでいた。すでに 90 歳を過ぎ視力は失っていたが饒舌で、日本のこと、濱田庄司や柳宗悦のこと、日本の陶芸のこと等を話してくれた。私の用意した質問は「タネギレ」になってしまい、彼から「もう他の質問はないのか」と催促されてしまう程だった。翌日また来いと言われて結局 2 日間にわたるインタビューとなってしまった。翌年、氏は 92 歳で亡くなるが、私が彼に会った最後のジャーナリストとなり、撮影した写真は貴重な存在となった。

リーチ氏が濱田庄司氏と作ったリーチ工房は、彼の死後夫人のジャネット氏が引き継いだが、彼女の死後工房は荒廃し、廃止寸前まで行ってしまったが、2004 年には土地の有志を中心に修復運動が始まった。私は早速運動に加わり、日本担当委員ということで、日本へのパブリシティーや益子や日本民芸館とのコンタクト、資金集めを担った。工房は 2008 年に立派に修復され、現在では博物館、展覧会場、ワークショップ等を含む陶芸センターとして一般の人にも公開されている。

そのリーチ工房が 2020 年には 100 周年を迎える。リーチ工房では特別展が企画されており、濱田庄司の故郷益子でも陶芸美術館で大きなバーナード・リーチ展が開催される。私の撮影したバーナード・リーチの写真もその時に展示されることになっている。

また、私は過去の経験をもとに、来年には日本で「リーチ工房」という本を上梓することになっている。

この様に過去30年も40年も前のことが今になって役に立っていることが多い。「老兵は消えゆくのみ」と思っていたが、どうして、どうして、まだまだ消えてしまうには早過ぎる。
と、まあ、格好の良いことを言っているが、実は昔の写真が今になって役に立つとは言いながら、私の場合、その写真がちゃんと整理されていないのである。30年前に撮影した写真を探し出すのは一苦労である。とにかく50年も写真を撮り続けているが、撮りっぱなしで、引き出しやロッカー、キャビネットに放り込んであるだけである。カズオ・イシグロの写真といっても、何処を探していいのかも分からない。当時はデジタル以前で、白黒、ネガカラー、スライドと3種類のフイルムを使い分けていた。注文が来るたびに家中を引っ掻き回して写真を探す体たらくである。

そこで今回の結論である「私から一言」である。写真だけでなく自分の経験したことはそのたびに整理しておくことである。日記形式でも良いし、将来役に立ちそうな情報は丁寧に記録しておくことである。写真の場合には撮影年月日を書き留めて項目別に分けて保存しておけば、私の様にその度に家中引っ掻き回すことは避けられるはずである。普段の心掛けが必要である。

私は誰？

飯塚忠治

「ふーん、I am who I am. ね」
と水のボトルスタンドの向こう側で若い英国人の青年が、娘のTシャツを見ながら何かすごく感心したような様子で言っているのが耳に入って、１２歳の娘の白いTシャツに目をやると、まさしく“I am who I am”と黒いマジックペンで書かれた文章が眼に入った。かの青年が何も言わなかったら私はそれが何であるかずっと見過ごしていたかも、現にウォーキングマラソンが始まってからの長い間知らずにいたのだから。

（注；ウォーキングマラソン、大きなチョコレート会社がオーガナイズしたチャリテーの１５キロメートルくらいだったと思うが、所定のコースを歩き通すと、チョコレートの入ったバッグがいただけるということで、もうそれだけで参加！参加費は一人５ポンド、このお金がチャリテーに）

その時は娘と朝９時から既にウォーキングマラソンに参加してもう２時間くらいが過ぎていた。テームズ河畔に置かれたウォーキングマラソンの参加者のための水を提供するサービスステーションでの出来事だった。その日は青空が広がる夏の熱い日で、川沿いの並木の木々の葉の間からはテームズ側の水面が陽の光を反射してきらりと輝いていた。

日本で７年間勤務していた外資系の会社を辞職して自分たちの意思で家族３人で英国にきて１５年目の夏、あの日の出来事はどうしても頭から離れない。それはきっとロンドンに住むことで始めて知識として知った【人種差別を含む多様な差別ということが存在するんだ】ということを気付かせくれたことが其の源であるかも知れないと思う。

娘は日本人のいない学校に通っていて親の目で見ても学校で特段に差別をされたとか、いじめにあったとかは無かったように思えたが、この“I am who I am”を考えるにつけ、ひょっとしたら娘は自分のアイデンテティについてしばらく考えていたのだろうというところに落ち着いた。

両親は日本人、学校に行けば日本人らしい顔を見ないし、私は誰？と・・・・。
そして行き着いたところが、「私は私、日本人とか英国人とか、そのようなことではなくセアラという個人です」こう言いたかったに違いないと今の私は思っている。このように考えると、これだけの多くの人種が住むロンドンで私の人に対する見方、視野が広がったような気がするのだ。娘に教えられた出来事だった。

それから又、１５年が過ぎ、あるランチの席でのことだが、様々な話題、日本の社会、政治、日本人としての生き方などの会話の中で、アドバイスされたことも思い出される。またもや視野を広めてもらった体験があった。

「飯塚さん、今、日本人として私はこれはすべきでないし、日本人としてそう思うのは当然かも知れませんね、と言われましたが、其の日本人としてと言われたところを人間としてと置き換えてみたらどうかしら？」なるほど思い、其の言葉を言い換えてみると、
「人間として私はこれをすべきでないし、人間としてそう思うのは当然かも知れませんね」
確かにこの言葉で物事を話したり考えたりすると世界が広がるような感覚になるのです。普遍的な世界が広がるような気持ちにもなりました。この方は私よりも年齢が一回りシニアーな方で心は自由な発想をもたれている方で今でも溌剌とご活躍されています。

日本では近隣諸国の中の複数国との関係がギクシャクするところもあり、時々耳にすることですが「俺はあの国は嫌いだとか、あいつらとか・・・」。乱暴な言葉での話を聞くことがあって心が痛むのですが、人を判断するときには国を頭に掲げないで個人個人として付き合えるようになって欲しいと常に思う。

日系企業の海外進出数は昨年の数字では７万を越える拠点数と報告されています。多くの日本人が海外で活躍されている事はこの数字からも想像できます。
日本人と言っても国籍を共有している個性の違った個人の集団で一定の文化を共有してはいても其の幅はかなり広いのではないかと思う。

個人を尊重しながら引き続き英国での生活を楽しんでまいりたいと思います。

水の都ロンドン

渡邊道英

ロンドンの名所旧跡を訪ねて感動するのは「歴史ある建物の美しさ」と「樹木に覆われ、緑が一杯の大きな公園」が至る所にあることでしょう。
『バッキンガム宮殿』『国会議事堂』『ウエストミンスター寺院』の建造物の威厳に満ちた優美さ、『大英博物館』『自然博物館』『ナショナルギャラリー』『Royal アルバートホール』の威圧されるような建造物の雄大さ、これらの建築物は全て、歴史と伝統に培われた施設であり、現在も広く活用されてることに驚きを感じています。

ところで、私はロンドンに来てもっとも惹かれたのが『テームズ川』であり、このテームズ川と共に拓けた《英国の首都 LONDON》である。『テームズ川』は何時見ても、その豊富な水量と勢いのある水の流れに見惚れてしまう。
最初に『テームズ川』に出会ったのは Opera を見終わった後で「ウォータールー橋」を渡ったときでした。
年の瀬の押し迫った、凍てついた黒々とした川面でした。『国会議事堂』とミレニアム記念で作られた『ロンドン・アイ』のシルエットが鮮明に映っていました。その後より近く『テームズ川』に接したのは春先の『THE BOAT RACE』を観戦した時でした。伝統行事となっているケンブリッジ/オックスフォード両大学対抗ボートレースでした。この年の夏『ヘンリーレガッタ』と『キングストンレガッタ』を見て英国の三大レガッタを記憶にとどめることができました。沢山の写真やビデオテープで撮影し、高校、大学のボートクラブの旧友共に誇らしげに報告したことを思い出しています！

現在の私どもの住まいがある「SURREY 州」の州都「KINGSTON」はテムズリバーが大きく蛇行している場所であって、ヘンリ ８世などイングランド国王の別荘地『ハンプトンコート』や狩猟の場所であったと言われている『リッチモンドパーク』更には世界の植物の種子を収集、植物研究で有名な『KEW』があり全てにテムズ川が影響を与えており、現在は観光船の往来もあって、沢山の観光客がやってきます。

テームズ川の上流には『オックスフォード』があり、『ウインザー城』も『アスコット競馬場』の横を流れて我が町 KINGSTON を経由して、『ロンドン塔』『ロンドンブリッジ』更には『グリニッジ Greenwich』へと流れています。川は過去に生きた人々の営みと心を私たちに伝えてくれます。テムズ川に感謝です

巨匠メンゲルベルクの芸術に魅せられて

宇山　秀樹

今を遡ること３６年前、大学生であった私は、「古典音楽鑑賞会」なるサークルにおいてクラシック音楽のレコード鑑賞に浸る日々を送っていた。ある日、先輩が持参したチャイコフスキー「悲愴」の古いＳＰ録音の復刻ＬＰを聴いて、凄い衝撃を受けた。情緒纏綿たる緩徐部と激しい急迫部分の鮮やかなコントラスト、めまぐるしく変わるテンポと強弱、甘美極まりない弦のポルタメント…それまで聴いたこともない超個性的な演奏に、すっかり魂を奪われてしまった。これが偉大なる巨匠メンゲルベルクの芸術との出会いであった。

ウィレム・メンゲルベルクは、２０世紀前半の最も傑出した指揮者の一人であり、戦前はトスカニーニ、フルトヴェングラー、ワルターと共に四大指揮者と言われていた。１８７１年オランダ・ユトレヒト生まれのドイツ系オランダ人で、１８９５年に創設８年目のアムステルダム・コンセルトヘボウ管弦楽団（以下ＡＣＯ）の常任指揮者に就任。二流だったこのオーケストラを徹底的に鍛えてベルリン・フィルやウィーン・フィルと並ぶ名オーケストラに育て上げ、１９４４年まで約５０年にわたり君臨した。その間、１９２２年～３０年にはニューヨーク・フィルの常任指揮者も務めた。しかし、第二次大戦中、ナチスドイツに占領されたオランダやドイツで指揮活動を続けたことが仇となり、ナチス協力者の烙印を捺されて母国オランダと音楽界から追放され、１９５１年、蟄居していたスイスの別荘で失意の内に世を去った。

その芸風は、繊細でありながら豪快で情熱的、ロマンティシズムの極みとも言うべき解釈、大胆なルバートと蠱惑的なポルタメントは他に例を見ない。しかも、変幻自在のメンゲルベルクの棒に一糸乱れずついていくＡＣＯのうまさたるや驚異的である。しかし残念なことに、メンゲルベルクの遺した録音はＳＰ録音か状態の余りよくない放送録音ばかりであり、戦後のＬＰレコード時代初期にも活躍したトスカニーニやフルトヴェングラーら同時代の大指揮者たちに比べると知名度は大きく劣る。また、クラシック・ファンの中でも、古めかしい１９世紀的スタイルの時代遅れの指揮者と見る者が少なくない。しかし、この個性こそ、均質化と没個性化の進んだ現代のクラシック界において、見直されるべき不朽の芸術であると筆者は信ずる。

さて、話は３６年前に戻る。「悲愴」の演奏に衝撃を受けた私は、メンゲルベルクのレコードをできる限り多く収集しようと心に決めた。当時私は家庭教師のアルバイトで稼いだ金をほぼ全てＬＰレコード購入に費やしていたが、メンゲルベルクのレコードは多くが廃盤になっていて、当初入手できたのは、ベートーヴェン交響曲全集、バッハのマタイ受難曲、チャイコフスキーなど２０枚程度に過ぎなかった。メンゲルベルクの廃盤ＬＰを求めて東京の中古レコード屋をあちこち探し回ったが、なかなか見つからなかった。その後３～４年経つ間に、一部マニアの間でメンゲルベルク・リバイバルの静かなブームが始まっていたのか、珍しいプライベート盤ＬＰ（１枚３５００円～４２００円もした）が出回り始め、オランダの Philips からＣＤもリリースされ、私は食費を削ってでも嬉々として購入したが、まだまだ珍品扱いであった。東京・お茶の水の中古レコード屋で、１９２０年代前半にメンゲルベルクがニューヨーク・フィルを振ったアクースティック録音の希少な米国盤を見つけたときは、１万円もするそのＬＰを清水の舞台から飛び降りるような気持ちで買ったものだ。

１９８９年、社会人になっていた私は憧れの英国の地を踏み、英軍附属の語学学校での研修の傍ら、時折ロンドンに出てきてはコンサート・オペラ通いとレコード・ＣＤ漁りに精を出していた。ソーホーにあった Harold Moore Records の地下は、 中古クラシックＬＰの宝庫であった。メンゲルベルクのレコードはそこでも希少であったが、たまに掘り出し物があったし、これまた日本では滅多にお目にかかれなかったクーセヴィツキーのＬＰなど見つけては狂喜して買っていた。(Harold Moore Records は、最近のロンドンの家賃の高騰で商売を続けられなくなり、２０１７年１月に閉店したそうである。英国のレコード文化の終焉を象徴するが如きであり、寂しい気がする。)
その頃メンゲルベルクの珍しい録音を復刻したＬＰやＣＤを盛んに発売していた Michael G. Thomas という爺さんの店も訪れたことがある。店といっても、パディントン辺りのアパートメントの一室であり、

入ると棚にものすごい数のＬＰやＳＰ、床にも足の踏み場もないほどＬＰが散乱していた。その中から不健康そうな爺さんがゆらゆらと現れたが、この人がメンゲルベルク研究の権威（？）Thomas 氏であった。私がメンゲルベルクの大ファンだと告げると、Thomas 氏は、自分は晩年のメンゲルベルクとの間で、追放から解除されたらレコーディングをしてもらう話を進めていたのだが、追放解除の前に彼が亡くなってしまったのは大変残念だった、と遠い目で語ってくれたことを、懐かしく想い出す。

そのうちに、英国の Pearl や Biddulph、オランダ Philips、日本のキング、フランスの Tahra 等々のレーベルからメンゲルベルクの復刻ＣＤがいろいろリリースされるようになり、それまで未復刻や未発売の録音を含めて、入手できる数が格段に増えた。２００７～０９年には、新たに発掘されたオランダやフランスの放送録音の音源を初めてＣＤに復刻したものまで登場したのは僥倖であった。おかげで、私は収集歴３０数年にして、メンゲルベルクの復刻録音の多くを集めることができた。２０１６年には VENIAS というレーベルからメンゲルベルクのスタジオ録音のほぼ全てと放送録音の一部を集成した４２枚組のＣＤ「Willem Mengelberg The Collection」がリリースされ、日本の通販で６０００円もしない値段（１枚１５０円弱！）で売られている。いい時代になったものである。

ここで、私が特に愛するメンゲルベルクの名演（特記しない限りオーケストラはＡＣＯ）をいくつかご紹介したい。

（１）ベスト１は言うまでもなく、冒頭に触れた「悲愴」（１９３７年録音）である。筆舌に尽くしがたい濃厚なロマンティシズムに酔いしれる。この曲は超有名曲だけに名盤が多く、例えば、早いテンポでたたみかける凄絶なムラヴィンスキー指揮レニングラード・フィル、精緻で美しく彫琢されたカラヤン指揮ウィーン・フィル（１９８４年）も素晴らしいが、メンゲルベルク盤を聴いてしまうと、どれも物足りなく感じる。この曲については、１８９７年（チャイコフスキーが作曲してからわずか４年後！）にメンゲルベルク指揮ＡＣＯの実演を聴いたノルウェーの作曲家グリーグが、感激の余り椅子の上に立ち上がって絶賛のスピーチをしたという逸話が残っている。なお、メンゲルベルクの「悲愴」は他に、１９２３年ニューヨーク・フィル（第２楽章・第４楽章のみ）、１９４１年ＡＣＯ、１９４４年パリ放送管弦楽団（ライヴ）の録音が復刻されており、解釈は似通っているが、１９３７年のものが最も凄味がある。

（２）同じくチャイコフスキーの交響曲第５番もメンゲルベルクの十八番で、全曲録音は１９２８年、１９３９年（ライヴ）、１９４０年（ベルリン・フィル）の３種が遺されているが、第２楽章・第３楽章のみの録音ながら１９２７年の演奏が最高に素晴らしい。壮年期（５６歳）のメンゲルベルクとＡＣＯの覇気に満ちた、しかし夢のように美しい演奏に痺れる。全曲録音では、少々他人行儀なベルリン・フィルとの１９４０年盤は今ひとつだが、ＡＣＯとの２枚はいずれも良い。特に１９３９年のライヴ録音は、原盤の保存状態が悪かったのか、音はかなりひどいものの、超濃厚で熱気に満ちた演奏はものすごい。

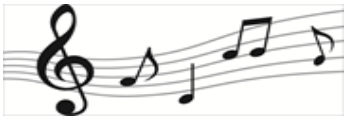
（３）リヒャルト・シュトラウスの交響詩「英雄の生涯」。メンゲルベルクは１９０３年ロンドンに初登場し、リヒャルト・シュトラウス音楽祭を開催したが、その解釈に感銘を受けたシュトラウス自身がメンゲルベルクに献呈した曲である。メンゲルベルクはこの曲を２回、１９２８年ニューヨーク・フィル、１９４１年ＡＣＯを振って録音しているが、何故か今ひとつ冴えない後者に比べ、古い方のニューヨーク・フィル盤は圧倒的な迫力で迫ってくる。１９２０年代としては録音もかなり鮮明な方で、当時のアメリカの技術水準の高さを示している。これぞ「英雄の生涯」の決定盤と絶賛したい。

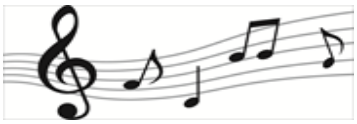
（４）マーラーの交響曲第４番（１９３９年ライヴ録音）。メンゲルベルクの指揮に感心したマーラーは、第８番（千人の交響曲）を彼とＡＣＯに献呈している。メンゲルベルクは、マーラー没後１９２０年にＡＣＯ常任指揮者就任２５周年としてマーラー音楽祭を開いたほどマーラーを得意としていたが、録音を残したのは、第４番以外ではわずかに交響曲第５番のアダージェット（１９２６年）と「さすらう若人の歌」（１９３９年ライヴ録音）のみである。第４番は、第１楽章冒頭からめまぐるしく変転するテンポと細かな表情付けが実に面白い。第４楽章のソプラノ独唱（Jo Vincent）が少々弱いのが惜しいが、第３楽章の陶酔感など

比類のない素晴らしさ。これに匹敵しうる名盤は、天国的な慈愛に満ちたブルーノ・ワルターの１９６０年ウィーン・フィル告別演奏会ライヴ録音と、精巧なガラス細工のような透明感溢れるカラヤン指揮ベルリン・フィル（１９７９年）くらいであろう。なお、第５番のアダージェットは、８分もかからない速さ（普通は１１分～１２分くらい）に驚くが、全編ポルタメントをかけまくった幻想的な演奏が凄い。
（５）１９３９年のライヴ録音であるバッハの「マタイ受難曲」は、誠に「泣ける」演奏。特に、マタイ全曲中の白眉である「憐れみたまえ、我が神よ」はただでさえ感動的だが、哀切を極めるヴァイオリンのオブリガードとそれに乗せて歌うアルトが、心の奥底に染みる。雑音の向こうからは聴衆のすすり泣きも聞こえてくる。時代遅れなスタイルのバッハとして排斥する向きもあるが、これに感動できない人の気が知れない。
（６）以上のような大曲のみならず、より短い管弦楽曲においても、メンゲルベルクの指揮は極めて個性的で、大変魅力的である。
例えば、ワーグナーの「ローエングリン」第１幕への前奏曲（１９２７年）では、弦のポルタメントの多用が他に類を見ない夢幻の響きを創り出し、聞き手を陶酔させる。同じくワーグナーの「タンホイザー」序曲は、１９２６年と１９３２年のスタジオ録音、１９４０年のライヴ録音の３種が残っており、いずれも名演であるが、１９３２年の演奏は古今東西未曾有の大名演であり、フルトヴェングラーやカラヤンですら全く比べものにならない。ヴェーヌスのテーマを奏する弦と木管の甘美なこと！最後のクライマックスでは、弦が大きなうねりとなって怒濤の金管と融合し、興奮の坩堝と化す。
リストの「前奏曲」（１９２９年録音）やラヴェルの「ボレロ」（１９３０年録音）も豪壮華麗、フィナーレに向けた盛り上がりは元祖爆演と称してもよいだろう。チャイコフスキー「ロミオとジュリエット」（１９３０年録音）は誠に哀しく劇的で美しい。１９３７年録音のベルリオーズ「ローマの謝肉祭」は、ただでさえ盛り上がる曲だが、あの沸き立つような曲想をこれほど見事にリズミカルに演奏したものは他に皆無。何度聞いても興奮させられる。そして、スッペ「詩人と農夫」（１９３２年）のポルタメントを利かせたチェロ独奏の何たる艶めかしさ！
（７）メンゲルベルクは協奏曲の伴奏指揮者としても優れており、ラフマニノフのピアノ協奏第２番（ワルター・ギーゼキング独奏、１９４０年ライヴ録音）、ベートーヴェンのヴァイオリン協奏曲（グイラ・ブスターボ独奏、１９４３年ライヴ録音）、ブラームスのヴァイオリン協奏曲（ヘルマン・クレバース独奏、１９４３年ライヴ録音）など、魅惑的である。また、フランスのマリブラン社が発掘した１９４４年１月のパリ・シャンゼリゼ劇場での珍しいライヴ録音では、大家アルフレッド・コルトーと共演したショパンのピアノ協奏曲第２番や若き日のポール・トルトゥリエを起用したドヴォルザークのチェロ協奏曲を聴くことができる。パリ放送管弦楽団の技術的水準はＡＣＯに遙かに及ばないし、雑音も相当ひどいが、連合軍によるパリ解放の７ヶ月前という戦時下の貴重な記録であり、コルトーの詩情溢れるピアノやトルトゥリエの天馬空を行くかの如きチェロと共にメンゲルベルク最後期の光芒を放つ録音として、挙げておきたい。

他にもご紹介したい演奏は山ほどあるが、いくら紙面があっても足りないので、この辺で筆を置くことにしようか。と思ったが、一つだけ、殊の外ユニークなベートーヴェンの第９について付け加えさせていただきたい。フィナーレのプレスティッシモをフルトヴェングラー張りのアッチェレランドで駆け抜けるかと思いきや、最後にものすごい急ブレーキをかけて、冗談のような遅さで終わることに、のけぞること必至である。万人向けとは言えないが、面白いことは間違いない。

以上書き散らしたことを読み返してみると、音楽を語るのに言葉は何と無力なことかと痛感させられる。百の駄文は一聴に如かず。ご関心を持たれた方には是非メンゲルベルクのレコードを一聴いただければ、誠に幸いである。





近頃　私のはまっていること

田村　陽子

ずーっと以前に、娘と毎日連絡を取るために買ったモーバイルを 4 年前にスマホに切り替えた。そのスマホのお陰でメールが出来るようになり、又ユーチュウブで色んな動画を観る事が出来る様になった。然し　近年視力が弱ってきて目の疲れを感じる様になったので、かねがね欲しいなーと思っていたタブレットなるものを買うことにした。

画面が大きくて、ワクワクしながらユウチュウブの動画を検索していると“徹子の部屋”という懐かしい番組に出会った。84 才の徹子さんはモグモグした喋り方を除けば、髪型も昔と同じで若わかしかった。

ある日その番組に不思議な女声？がゲストとして現れた。「三輪明宏でございます」と言って長ーい睫毛をパタパタさせた。三輪明宏ってどんな人？と検索していると、人生相談の番組をもっていて、そこに、瀬戸内寂聴さんが登場。二人で“女性の幸せとは”について対談が始まった。あいまに視聴者からの質問に答えたりしていた。例えば「私は結婚してなくて、不幸です」アドバイスを何か？これに対して三輪さんの回答は、「結婚式で、何で皆んな白無垢や白いドレスを着るんや？あれは死に装束だよ。結婚したら皆な幸せになると思ったらあかんよ！」と。そのトンチに私は思わずふきだしてしまった。

又瀬戸内寂聴さんは 50 才で出家して、94 才になる今も“生きるとは？命とは？”を追究しながら小説やエッセイを書き続けている。その迫力に圧倒されながら動画をみていた。

次にはまっている番組は音楽関係のもの。

“バイオリン奏法”の動画を観ている内に、服部百音という 18 才のバイオリニストの動画に出会った。練習のために指が切れたのか、左指にプラスターを貼って演奏していた。又顎の下、左肩が赤くあざになって、痛々しかった。バイオリニストだった母親の執念とも思える指導、応援に、ただ、ただ脱帽。そして心を打つ素晴しい演奏だ。

次に　Itzhak Perlman というユダヤ系アメリカ人のバイオリニストの動画。おやっ、と思ってよく見ると両手にクラッチをつけて足をブラブラさせながら登場。そうしてお付きの人が持っていたバイオリンを手にとり、椅子に腰かけ演奏がはじまった。映画にもなった「Schindler's List」の中で流れる哀しくも美しいメロディを弾きはじめた。

「一体　これはどうした事だろう！」と思って検索。3 才でバイオリンを始めたが、4 才の時にポリオにかかって足がパラライズしてしまった、と。しかし、類い稀なる才能の故に母親とアメリカに渡りジュリアード音楽院に入学。そして 73 才になる現在も心暖まる素晴らしい演奏をしている。

この様に、ユウチュウブの動画を通して、世界中の素晴しい人々に出会えたことは何と感謝な事でしょうか。

そうして、このタブレットを使って初めてこの原稿をタイプする事ができた！
この文明の利器に感謝！！

英国春秋歌壇

バロー典子

三十一文字に寄せて伝えむ

七とせを　越えて更なる　思いあり
三十一文字に　寄せて伝えむ

丞きはる　命のもとを　尋ぬれば
大和の国に　生まれ来しこと

散歩する　夫とふたりの　影踏みて
枯れ葉音する　道を歩めり

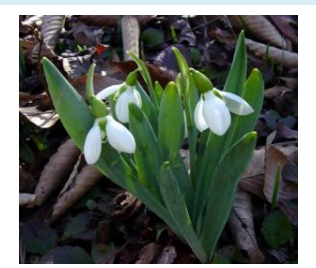
行く秋を　惜しみて落ち葉　踏むわれに
枯葉音して　かおり立ちたり

冬枯れの　裸の大樹　陽を受けて
黄金色の　トーチとなれり

グラナダの　デコボコ坂の　乳母車
押せば揺れてる　日本のお守り

飛行場の　トロリー押せば　よみがえる
初孫乗せし　乳母車のタッチ

“子は宝”　言いて育てて　下さりし
亡き母恋し　有難たかりき



雪割りて　小さき頭を　下げて咲く
スノードロップス　命のちから

葉を落とし　小枝のすべて　空に見せ
大樹立ちおり　寒き冬日に

ふるさとの　ブルー　プラネット　愛しみて
“ありがとう”だけは　残し逝きたし

英国春秋俳壇

エリオットつや子

寒　　月

内よりも外が暖かつたもみじ

眠けさのとれぬままなり秋終日

白電車黄葉の中まっしぐら

葉を落とし大地に休らぐ栃大木

待ちわびてついに終わりぬクリスマス

小包がみかん箱にて届きけり

よそ猫にうなる我が猫年の暮れ

雲くぐり寒月昇る月の道

枝たどるリスの後から雪が散る

黄水仙息はずませて坂登り

2.5 次元について思うこと

渡邊伸吾

先日、友人からの誘いを受けて、舞台「PLUTO」を観に行った。随分と久しぶりのバービカンシアターで、「2.5 次元舞台」という、聞いたこともないジャンルの舞台。原作となった「PLUTO」というマンガが好きなことと、繁忙期の気分転換にも良いなと思ったので観に行ったのだが、なかなかどうして、3 時間という比較的長めの観劇時間にも関わらず、それをあっという間だと感じさせるくらい、観る者をその世界観に引き込む、そんな作品だった。

正直なことを書くと、往々にして映画やドラマの実写化は、原作の世界観を壊すか、もしくは大幅に脚色したり、簡略化することが多い気がしていて、マンガ好きを自任する僕としては「PLUTO を舞台化？一体どんな作品になっているのだろう」と、期待と不安が綯い交ぜだった。

「PLUTO」は、手塚治虫の代表作「鉄腕アトム」のエピソードの一つである「地上最大のロボット」を、同じく漫画家の浦沢直樹がリメイクした作品だ。人間とロボットが共存する未来社会で起こる、世界最高峰のロボット達の連続破壊事件を軸に、ストーリーは、人工知能が「愛」や「憎しみ」を理解できるのか、そして人工知能がそれらを理解するとき、人間との境界は一体何なのか、といった問いを読者に投げかける。僕は、「心は理解できるのか」という意味で言えば、人間もまた心を全部理解出来るとは言えない、と思っている。だから、人工知能と人間の境界を考える時、作者は同時に「人間を人間たらしめるものは何か」という問いかけを僕らに投げかけているのではないだろうか、そんな風に思っていた。浦沢直樹といえば「YAWARA」という柔道マンガを思い浮かべる人が多いと思うが、僕にとっては「20 世紀少年・21 世紀少年」「モンスター」など、人間の心の中に潜む何かを描いた作品を多く発表しているマンガ家だ。だからこそ、生身の人間が舞台の上で、マンガにはない身体性をどのように活かして「PLUTO」の世界観を表現するのかは、とても気になるところだった。

観劇前にインタビュー記事を読んだり、トレーラーを You Tube で見たりしたときから、この作品に関わった人の中に「浦沢作品、もしくは手塚作品をこよなく愛する人がいる」ことを強く感じていた。演出・振付を担当しているシディ・ラルビ・シェルカウイ氏だ。氏は、ベルギー出身の世界的な振付師であり、そして手塚治虫の熱狂的なファンでもある。(2011 年には「テヅカ　TeZukA」という手塚治虫の思想や生涯をダンスというメディアで展開する作品を創作している) 。「PLUTO」は、マンガのコマ割りに見立てた区切りを中心に、原作の画像をふんだんに舞台中に織り込んで展開された。また、文楽の手法にヒントを得て、ロボット役の役者の動きを、ダンサーが” 人形遣い” として補完することで人間役の役者の動きと差別化させたり、プロジェクションマッピングを活用して、生身の役者と原作の画像をシーンに重ねたり、舞台作品の機能を最大限に活かして「PLUTO」の世界観を現実世界に象っていた。僕は、舞台を頻繁に観るわけでもなければ、芸術作品について一家言持っているわけでもない。自任できるほどの審美眼もない (と自任できる) 。ただ、浦沢作品のいちファンとして、この舞台が、原作が持つ世界観を深く解釈し表現しようとしていることがすごく伝わってきた。マンガの中にいる登場人物 ―アトムや天馬博士－を現実の肉体が象り、その声や表情や動きが、同じ現実を共有している自分に肌感覚として伝わってくる。マンガという一つの芸術がフォームを変えて自分の前に現れたことの新鮮さが、そこにはあった。

「PLUTO」を観て「2.5 次元舞台」について興味が出てきたので少し調べてみた。定義としては「2 次元のマンガ・アニメ・ゲームなどを原作とする、3 次元の舞台コンテンツ作品」のことで、日本では 1960 年代の「サザエさん」や 1970 年代の「ベルサイユのばら」の舞台化など特殊なジャンルとしての上演はあったらしい。だが、「2.5 次元舞台」として広く認知され始めたのは 2000 年代、「テニスの王子様」という、主人公の中学生テニスプレーヤーが、全国大会優勝を目指して試合を重ねる中で成長していく「青春スポーツ漫画」というジャンルの漫画の舞台化だ。他にも、自転車ロードレース競技で全国大会優勝を目指すチームの成長を描いた漫画「弱虫ペダル」や、日本の名刀を擬人化したパソコンゲーム「刀剣乱舞」など幅広い 2 次元創作作品が舞台化されている。知らない作品も多かったが、自分の好きなマンガという芸術世界が新しいフォームとして表現されることは嬉しい。しかし、You Tube でこれらのトレーラーや舞台俳優のインタビュー記事、ニュース特集を見ていて、僕は違和感を覚えた。「PLUTO」でラルビ氏が語った、異なる芸術世界に表現を象る (=2 次元と 3 次元をつなぐ) という本来 2.5 次元舞台がもっているであろう特性については、ほとんど語られないのだ。アニメやマンガの世界観を表現すると謳ってはいるが、どの特集を見ても僕には、「大量の若手新人俳優 (ほぼ素人) を舞台に立たせ、日本で主要な消費者層である F1 層 (20〜34 歳の女性) を舞台の顧客として取り込んだ」というビジネス的な視点しか感じられなかった。僕は、生身の人間がマンガの中のキャラクターと同じセリフをしゃべること、見た目や動きのクセが似ていることは、「モノマネ」ではあっても「2 次元の世界観の再現」とは言えないのではないかと思うのだ。

舞台の話とは違うが、映画やドラマでのマンガ・アニメの実写化も広義の「2.5 次元」だ。かつてドラゴンボールというマンガが実写化されたとき、「ラブストーリー」という原作には存在しない要素をハリウッドが持ち込んで (それがハリウッドの売れるテンプレートなのだから仕方ないとはいえ)ドラゴンボールファンの大顰蹙を買ったことがある。最近の攻殻機動隊 Ghost in the Shell というマンガの実写化では、原作の「人間だけがなぜ身体を再確認する必要があるのか」という問いを、「記憶が人間を感知する」というシンプルな着地点に収束させたことに対して、アニメ化の原作者押井守は「哲学的には後退してしまった」と評価している。

2 次元 (マンガやアニメ) と 3 次元 (映画や舞台) の決定的な違いについては、ギズモードジャパンのインタビューに答えた押井守のコメントが、僕は的を得ているのではないかと思う。『*本来アニメーションは情報量を補完するために言葉を導入せざるを得ないんですよ。だから実写の『攻殻』は決定的に違うんだよね。ハリウッドと日本映画の差とかそういうレベルじゃなくて。やっぱり役者さんに支えられてるのが映画の王道なんだよ。アニメーションとは原理的に違う。だから映画はアニメーションの表現力には永遠に追いつかない。ただ、良さもある。やっぱりスカーレットが演じた素子はスカーレットだった。他の何者でもない。アニメーションは違う。ゲームと一緒で、100 人がみたら 100 人がみて成立するのがアニメーションなんで。そういう原理的な違いがある。どちらが鑑賞大会でゴージャスかって言ったら実写映画でしょ。あれもこれもさ、見たいシーンいっぱいやってるじゃん。でもそれはどうでもいい。トータルの印象で世界観で圧倒しようっていう意思があるかどうか*』(ギズモードジャパン、2017 年 4 月 6 日のインタビューより抜粋)

2 次元創作であるマンガやアニメを、生身の人間が映画や舞台で表現するということ、つまり、ある芸術世界の表現を別の芸術世界で再表現することはとても難しだろう。ただ、マンガ・アニメ好きの僕の願いに過ぎないかもしれないが、この試みはきっとこれからも続いていくと思うし、だからこそ 2. 5 次元という新たな表現が、消費社会の中に埋もれてしまうのはもったいないと心から思う。ラルビ氏が「PLUTO」で見せてくれた、トータルの世界観で観る者を圧倒するような 2.5 次元作品が今後もたくさん登場することを願ってやまない。

ルチアとサロメ－狂乱の場
オペラ「ランメルモールのルチア」と「サロメ」から

小川のり子

「女は怖い！」とは何を隠そう、私の口からふともれた言葉だが、もっともこれは次に述べようとするオペラのヒロイン２人についての思いである。愛する人のために殺人を犯すのは往々にして女性の主人公に多い。恋に狂ったと言ってしまえばそれまでだが、反面、男性はそう簡単に恋には狂わない。が金や名誉が絡めば殺人も厭わないのかも知れない。

すっかり狂ってしまったヒロイン、ルチアが血染めのウエディングドレスとヴェールを引きずり、絶望と歓喜の中で切々と歌うアリアはこのオペラの圧巻でもある。愛する人から引き離され、無理に結婚させられた男を殺すという悪夢のような現実から逃れ、今、そう願った恋人との世界をさまよう。天上からのハーモニーを聴き、ああ私たちのために準備された結婚式の音楽がと喜び、とうとう私は貴方のもので貴方は私のものと喜び、人生は慈悲深い天の微笑みだと歓喜に身を震わせる。ほとんど一人で歌い続けるルチアのアリアは延々と２０分近く続くが、その間、聴衆はすっかり彼女の悲運に身をつまされ、息をひそめて舞台に魅入っている。そして歌が終わると同時に爆発するような「ブラボー」という歓声と鳴り止まぬ拍手が続く。ヒロインを狂わせた悲しみが聴衆にじかに伝わるという感動的な場面でもある。

その狂乱状態がもっと強烈で聴衆に強い衝撃を与えるのがヒロイン、サロメである。彼女は自分の意思をはっきりと主張でき、運命に弄ばされたり、政略結婚に身を任せたりするルチアのような女性ではない。もっとも時は遡って西暦３０年頃の話で、その頃の女権がより強かったとは思われないのだが・・・。彼女の狂乱は自分から招いたものであり、生首を抱きしめながら歌うアリアは何とも猟奇的で救いがたい気がする。地下牢から引き出された洗礼者、ヨカナーン（ヨハネ）に向かっていきなり、「あなたのその白い身体と赤い唇に触れさせて」と言い寄るのは、まるで「月を取ってほしい」とせがむ駄々っ子のようであり、恋い焦がれている相手に対してとは思われない。最後に血の滴り落ちる彼の首をかき抱きながら、「やっとあなたの唇に触れたわ」と誇らしげに歌うシーンに、聴衆は悪夢を見ているようで身動きも出来ず、息をひそめて舞台に魅入っている。しかしフィナーレは絶大な拍手でもって迎えられるこのオペラには、人間の感情の暗い部分を揺さぶる何かを秘めているのかも知れない。

最近、この２作のオペラを観て、改めて“狂乱”について考えてみた。もし悲しみの極限が人に狂乱状態を誘うのなら、妄想も行き着く果てはそうなのかも知れない。ルチアは殺人という手段で一時的な逃避をこころみたが、その見返りは大きく、自分を失い、最後は哀しみに打ち負かされてしまう。かたやサロメは、叶わぬ恋が高じて妄想と言う悪魔に憑りつかれ、やはり自滅の道を辿って行く。ただ２人には大きな違いがある。ルチアは狂ったとはいえ、最後は悲しみのなか、生きて行くことを止めてしまうのだが、サロメは歓喜がもたらした狂乱状態の中で、殺されてしまう。しかし、なぜサロメが洗礼者の首にあれだけ固執したのか、私にはよく分からない。“我がまま娘が叶わぬ恋に自暴自棄”と単純に片づけてしまえば簡単であるが、勿論それだけではないはず。彼女を取り巻く複雑な環境、母親の再婚や義父の存在、横暴なローマ人の圧政、議論ばかりしている煩いユダヤ人等が彼女に神を信じない厭世感を植え付けたのかも知れない。偶然にも、この２作ともヒロインが血みどろになって歌うシーンがクライマックスになっている。その場面は両者共ほぼ一人舞台で長いアリアを歌い続けるのだが、その間、返り血や切られた首から滴り落ちる新たな血で、歌手の顔も手もドレスも血だらけになってしまう。血は人の心を騒がせるもので、それがヒロインの狂乱の引き金にもなっているのかも知れないし、また聴衆の心に興奮状態を植え付けるのかも知れない。

２作とも舞台にかかる機会が少なくない作品ではあるが、“狂乱”に至らせたヒロイン２人の背景を簡単

にご紹介したい。

「ランメルモールのルチア」
オペラはガエタノ・ドニゼッティ、原作はウォルター・スコットの小説「ラマムアの花嫁」
場所はスコットランドの南部、ラマムア(Lammermoor)
アストン家の娘ルチアは敵対関係にあるラベンスウッド家のエドガルドと恋仲になる。秘密にしていた間柄をルチアは兄に知られ、２人の中をさこうと種々の妨害を受ける。スコットランドの政治事情改善のため渡仏中のエドガルドが心変わりしたとのニセの手紙をうけ、ルチアは悲嘆にくれる。そんな折、兄がアレンジした伯爵との政略結婚を強要され、恋人の心変わりに失意の彼女はいやいやそれを承諾する。結婚式の夜、多くの客の中にエドガルドの姿も見られ、事情を知らない彼はルチアの心変わりを激しくせめる。２人が密かに交わしていた結婚指輪を投げ捨て、彼は彼女の元を去ってゆく。それから前述の、殺人、狂乱と続くが、以来、２人とも２度と会うことが出来なかった。死を覚悟した彼がその前にもう一度ルチアに会いたいと駆け付けた館の前で彼女の死を知らされ、「地上で結ばれることの出来なかった２人を、神が天上では結んでくださるように・・・」と祈りながら、彼は胸に短剣をつきたてるのだった。

仇敵の家柄の２人の恋、そして死と、これはスコットランド版の悲恋「ロメオとジュリエット」であるが、血塗られた狂乱の場が加わってこのオペラをよりドラマティックなものに仕上げている。またこの時代のゴシック小説でお馴染みの幽霊も何度か登場し、本家本元の面目躍如というところである。ドニゼッティが活躍した１９世紀イタリアではイギリスのロマン派作家がもてはやされ、このオペラ以前にも、同じ題材で既に３人もがオペラをつくっているそうである。

「サロメ」
オペラはリヒャルト・シュトラウス、原作はオスカー・ワイルドの戯曲「サロメ」、ローマ配下にあるガリラヤの副王、ヘロデ・アンティパスの時代。

酒宴の席でサロメは自分の体をなめ回すような義父ヘロデの執拗な目からのがれ、テラスに出て来る。「今夜の月は何故か不気味だ。不吉なことがおこるのでは・・・」と召使が嘆く。その時、サロメは地下牢につながれているヨカナーン（ヨハネ）の叫びの声、自分の母親が叔父のヘロデと再婚したことを糾弾するもの、を聞く。その声に興味を示した彼女は皆が止めるのも聞かず、彼を目前に引きださせる。そして前述の、「あなたの髪に、あなたの白い体に、そしてあなたの赤い唇に触れさせて・・・」とまるで“初めて見た男”かのように興味をしめす。ヨカナーンは「あなたの唯一の救いは神に身を投げ出すこと」と拒絶する。母親と共にテラスに現れたヘロデから踊りを所望され、褒美に何でも与えるからと執拗にせがまれる。踊りの後、サロメはヨカナーンの首を欲しがる。ヘロデの再度の説得も功を奏せず、最後は首切り役人によって切り落とされた首が彼女に差し出される。
「あなたが私を見つめてくれていたら、きっとあなたは私を愛してくれたに違いない」と首をかきいだきながら、「今、私は貴方が拒絶した赤い唇に触れている」と歓喜に身を震わせる。その狂ったサロメの姿に恐怖を覚えたヘロデは、同じ首切り役人に彼女を絞殺させてしまう。

１６歳の小娘のサロメがなぜいきなり洗礼者を愛し、彼を殺させてまで自分の欲望を満たそうとしたかは、ドラマとはいえ少々疑問符が付く。世紀末の退廃した文化を反映したワイルドの創作がそうさせたのだと言ってしまえばそれまで。だが、人間の心の内に宿る暗い影、悪魔的なもの、猟奇的なものを“愛”と言う衣を纏わせサロメに体現させた原作者の心の内は、私にはよく分からない。この洗礼者殺しの話は聖書にもあり（マタイ伝・マルコ伝)、「ヨハネの首」の題材として多くの画家達の創作意欲をそそったようだ。ただ一つ、サロメの狂乱はもしかしたら“月”も大いに加担しているのかも知れないと想像したい。昔から月には人を狂わせてしまう不思議な魔性が潜むとの言い伝えがある。このオペラの最初の部分に、「不気味な月・・・、不吉なことが・・・云々」とあるのはサロメ狂乱へと導く暗喩でもあるのかも知れない。そう言えば前出ルチアの狂乱の場の背景に、こうこうと照る満月が描かれているのをＤＶＤで観た記憶がある。これなども人の運命は人間だけではなく自然にも左右されるというその表徴として“月”が使われているのかも知れない。このオペラにはもう一つの見せ場、“７つのヴェールの踊

り”がある。踊りの褒美として洗礼者の首を勝ち取るのだが、この官能的な踊りのシーンと言い、最後の狂乱のシーンと言い、サロメを演じる歌手に要求される技量は極限に近い物と言えそうだ。この役を得ることはオペラ歌手にとって冥利と呼ばれるのか、それとも災難と呼ばれるのか、どちらなのだろうか。

冒頭に「男は簡単に恋には狂わない」と書いてしまったが、多くの悲恋物語は男性作家の手によってなされている。勿論、この２作もそうである。もしかしたらこれら男性作家の中に潜む女性性が、ルチアになりサロメになりすまして行動しているのかも知れない。という事は「男はその創作の世界で自分を失うほどの狂おしい恋に陥り、狂乱状態になるのを楽しんでいるのかもしれない。少なくとも私の周りの女性たちの中に、ルチアやサロメの元型を見つけ出すのは難しいように思われる・・・・。
という事は、最後はやはり「女は怖い」ではなく、怖い女の生みの親に対して「男は怖い」で締めくくった方が、良いのかもしれない。

英国春秋つれづれに

私の目を消されてもいい

私の目を消されてもいい
私はあなたの姿が見えるのです
私の耳をふさがれてもいい
私はあなたの声が聞こえるのです
足がなくても
私はあなたのそばにゆくことができます
口がなくても
まだあなたを呼びだすことができます
私の腕を折ってごらんなさい
私は手でとらえるように
私の心であなたをとらえますよ
私の心に封をされたら
私の脳髄が脈うつでしょう
そしてこの脳髄のなかへ火を投げこまれたら
私はあなたを私の血のうえになってゆくでしょう

リルケ詩集「グーテンベルグ２１」（石丸静雄訳）より
（ルー・アンドレアス・サロメに捧げられた恋の詩）

東京ガールズ

石山望

英国では、その頃、ちょっとした「日本ブーム」が起きていた。
それというのも、当地の BBC が、連日のごとく、日本に関する、一時間のドキュメンタリー番組を組んでいたからである。それも、数週間で終焉を見たが、私、これらの番組すべて、息をこらして、興味深く観た。

「日本人の審美眼」、「葛飾北斎」、「大牟田の刀鍛冶師」、「奄美の大島紬」、「日本の自然と動物」、、。
この様に、日本人にとって都合の悪いことは、何も取り上げられていない。
どれもこれもいいと思ったが、特に、日本の伝統工芸を守っていくことに情熱を傾けておられる少数の人達、90 歳の生涯を、最後まで絵を描くことに賭けた北斎の生き方、そしてその作品の素晴らしさ、、。
また、日本にまだまだ残っている、自然と動物の生態、。これらすべてのことに、いたく感動した、。

ただ、一つだけ、毛色の違った番組があった。今の日本社会の一側面を取り上げたものである。
「東京ガールズ」。私、知らなかったのであるが、こういう女性の「ポップグループ」が、ある種の日本人に人気があるらしい。女性といっても、10 代、ハイティーンであるが、そういう女性が 10 人ほどグループを組み、決められた、踊りを踊り、歌を歌う。みんな、可愛らしい、子供の様な服装をしているので、10 歳くらいに見えてしまう。仕草も、可愛らしい。

番組は、その中の人気者アイドル、”リオ柊”に焦点を当てて、作られていた。彼女 19 歳、でも、英国あたりに住んでいる人間からすれば、精々12 歳といったところである。特に、美女であるわけではない。どこにでもいそうな、可愛らしい女の子。歌も大してうまいとは思わない。彼女、スターであるはずだけれど、それにしては、気取ったところも、威張ったところもない。要するに、こういう「普通さ」が、このグループの女性に求められている条件なのだろうか。ここが、宝塚などとは違うところ。

それらのことは、まあいいとして、私が最も驚いたのは、こういうグループのファンの人たちに関してである。ほとんどすべて男性で、大体 20 代から、上は 50 代まで。熱烈なファンの様で、肩の入れ方も、その為のお金の使い方も半端ではない。どうやら、ある特定のアイドルには、そのファンクラブがあるらしい。

ガールズが公演中には、彼ら、当然大きな声を出して声援する。それがまた、黄色い電灯(torch)をみんな持っていてそれを振る。一糸乱れぬ統率のよさ。平和、平和、実に平和。なんだか日本のプロ野球の応援団みたい。

また、これらの男性軍、このガールズの公演をもれなく観るには、時間の融通が利かなくてはならないから、一般の勤め人というわけではなくて、自営業とか、学生とか。そして独身。こういう人を称して、「オタク」というんだとは、この時知った。

因みに、ヨーロッパとかアメリカで、爆発的な人気を持っている歌手というのは、大抵の場合、持ち歌の良さ、その歌唱力の素晴らしさ、などは、勿論であるが、その上に、何か「性的魅力」を持った人だと、私は思っている。そうではないであろうか。セクシー、、。エルビスプレスリー、マドンナ、ペギーリー、トムジョーンズ、、(マイケルジャクソンは、どうだか知らない。また、今時のビヨンセとか、アデルなどというのについても知らない)。

ところが、この東京ガールズに関しては、どうやら、そうではないらしいのである。
というより、逆に、「セクシー」とかいう、「大人の部分」があってはいけない。それだからといって、

この熱烈な男性ファンたち、いわゆる「幼児性愛者（ペドフィリア）」かというと、そんなこともない。要するに、ここでは、性的な要素がほとんど完全に欠落しているのである。かろうじて、舞台上のガールズ、腰をクルクル回して踊るだけという、、。

これら、熱心なファンたちは、公演後、CD を一枚でも買うと、御目当てのアイドルと話すことができ、軽く握手もできる。その間、約１分半。ただそれだけ、。そんなに好きならば、抱きついてキスでもするかと思うと、そんな所は更々ない。

私、かつて、日本で、ある歌謡歌手を知っていた。30 代の女性。
東京の亀有で、彼女の属するレコード会社の公演会があり、誘われて行ってみた。結果は、予期していた様なものではなくて、結構楽しかった。清水博正（盲目の歌手）の歌唱力に驚いた。
その時、聴衆の中に、やはり、その女性歌手のファンクラブの熱心な一員で、70 歳くらいの男性がおられた。態々、中部地方から、。彼女の公演には、できうる限り参加される。どこへでも（こういうのを”追っかけ”と言うんだそうである）。その人、御目当てのこの女性歌手が壇上に上がると、「、、ちゃ～ん」と黄色い声を上げられる。いかにも微笑ましい。しかし、この方、ある日、突然ファンクラブを脱退された。ご贔屓のこの女性歌手に子供ができたから、と言うのがその理由である。
彼女、結婚していたのは知っていたし、そこまでは許せるとしても、子供とはねえ、、。

昔、「島倉千代子を結婚させない会」と言うのがあったと耳にしたことがある。
この様な（清純派）女性歌手のファンにとっては、その歌手の「処女性」が大事なのである。たとえ「幻想である」とは分っていても、。

こういうの、日本に特有の現象なのかもしれない。
ああ、「日本少子化」の根は深い。

「縁」

日本人のよく使う言葉があります。
若い人は、どうかな、と思います。使われないかもしれません。でも、意味は知っておられるでしょうね。「縁」です。「えん」。「えにし」とも言います。

仏教用語。
人と人との出会いは、自分の力の及ばぬ、前世からの「運命」の力（縁）によって、予め決められている、とする考え方ですね。

「ご縁」と言いますから、何かありがたいもの。ですから、どちらかというと、良いことの方に使われる様に思いますが、「悪縁」とか「腐れ縁」とかいう言葉もありますね。
「縁談」といえば、昔流に言う「お見合い」の話のことです。
その縁談が上手くまとまれば、何か不思議な「運命の糸」によって、二人は結ばれたということなのでしょうか（実際は、そんなにロマンチックなものではないと思いますけれど）。

「因縁」は、「宿命による動かせない関係」。
「結縁（けちえん）」というのもあります。「仏道に入り、やがて往生できるきっかけを得ること」ですって、。

堅い話は、まあ兎も角、、。それにしましても、この「縁」、我々が、日常生活において極く軽く使う場合、実に便利な言葉ですよね。「この度は、まことに結構なご縁で、このお二方は結ばれ、今日の佳き日を迎えられる運びになりました、、」、「我々が、この様にして廻り会えたのは、やっぱり、縁だと思うの、私、、」兎に角、便利なんです、この言葉、。この言葉を使えば、大抵のことは型が付いてしまうんですからね。

しかも、とても丸く、。人を傷つけることなく、。正しく大人の言葉です。賢い、、。
何を隠そう、この私も使ったことがあります。

実は、私、過去に 5 年間付き合った女性があるのですが、その始めのころ、彼女のご家族にこう言いましたもの、。「私と K 子さんとの出会いは、正しく”縁”ですね、」

最近では、こんなのがありました。ある人と別れるに際し、メールを送ったのですが、その時に、やはり”ご縁”のお世話になりました。「我々の間には、残念ながら、どうやら”縁”というものがなかった様ですね。しばしの間でしたが、一と方ならぬご厚情、深謝いたします、、、、」（この場合は、向こうも別れたいと思っておられましたので、理由はどうでも良かったのです）

ことほど左様に、この「縁」という言葉、大抵のことに使えますので、使う側からすれば、便利で、非常に都合のいい言葉です、。

只、いかにも日本的で、”ほんわか、ほんわか”、。

この言葉を使われた側の人は、傷つくことはないにしろ、「ああ、上手くかわされたな、」と、思ってしまいます。
やはり、これも私の実経験からの話ですが、ある人と袂を別つ時、認めた手紙にはこう書きました。
「縁」で逃げようとすると、全く何も言っていないのと同じだと思い、もう少し、具体的に言いました、、。

「拝啓。

貴殿におかれましては、益々ご健勝のこととお察しいたします。

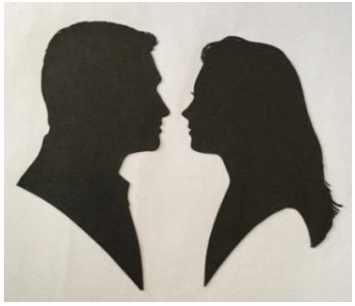
さて、今日私がこの様に貴殿にお手紙を差し上げることになりましたのは、他でもありません。
実は少々訳があってのことなのです。
貴殿と私、相容れないということが分ったのです。
我々、余りにもお互いの住む世界が違いすぎます。
生い立ちも、性格も、感性も、感受性も、価値観、人生観も違います。我々の趣味と言って、全く相重なる部分がありません。
貴殿は独立独歩の人　(完全に自己中、ワガママ)。
また、”金銭感覚”の違い、これは非常に大きいです（要するに、ケチ)、、。
これまでのご厚情は感謝いたします、。
お元気で、。」

紙切り芸人（シルエット切り）

ビドル惠

ここはセントジェームズ パレス。傷痍軍人を支援するチャリティーのイベントが催されている。Marl Borough 通りに面した地階の入口は地味で目立たないが、中に入って宴会場がある主屋へ進むと、赤いユニフォームの王室警護隊（アイリッシュガード)と、そのマスコットである大きなアイリッシュハウンドが出迎えてくれる。チャリティー団体の名前は “The Not Forgotten Association” 第二次大戦から、北アイルランド紛争、フォークランド、アフガニスタン、イラクなど各地の戦場で負傷し、障害が残った兵士達とその家族を、生涯にわたってお世話するのが主旨である。今日はその方々を招いてのティーパーティ、車椅子利用者が多いので、段差のある所はゆったりしたスロープが設けられ、リフトもフル回転だ。

「お仕事は何ですか?」と問われる毎に、ちょっと一息入れてから「紙切りの芸人です」と答え、それから具体的に説明して理解して貰えるまでに、随分と時間のかかる因果な商売をしている。日本人なら「あの寄席の高座で、二つに折った紙を楽しくお話ししながら切っていき、パッと開くと東京タワー!というやつですか?」と聞いてくれ、「それも時折り舞台でしますが、殆んどは横顔を切っています」と説明を始める事が出来る。これが西洋人だと“紙切り芸” 自体の存在を知らないので益々アヤフヤな問答になり、気力が続かずに「まっ、いいっか〜」と諦めてしまうのだ。



私の仕事は主に、お客様の横顔を見ながら、黒い紙を手早く且つ正確に鋏で切って、影絵として表現する “シルエット切り”。発祥は随分と昔の事で東ヨーロッパ辺りから、シルエットという呼び名で西ヨーロッパに広まったのが 18 世紀頃(イギリスはやや遅れてビクトリア王朝時代、日本では未だあまり知られていない)。油彩の肖像画が、貴族や裕福な極限られた人達の物だったのに対し、白黒のコントラスト美と短時間で出来上る手軽さなどに、シルエットは肖像画の技法の一つとして人々の人気を集めたのである。しかし写真技術が生まれてから衰退の道を辿り始め、私が活動を始めた 32 年前には、唯一ブライトン・ピアで切っていた方も引退し、英国では私ひとりだけとなってしまった(英国以外では、各地のディズニーランド、パリのモンマルトル、デンマークのティボリー公園など、観光客の集まる極限られた場所で切って貰える)。だが、長年仕事をして来た甲斐あって、希少価値を認め直して貰い需要も伸びたので、現在は 6 人にまで増えている。

パレスの主屋一階に連なる、王座の間、控えの間、音楽の間の両開き扉が開け放たれて、一部屋としてティールームに模様替えされ、円形テーブルが合わせて約 50 個、400〜450 人が着席する予定だ。音楽の間の一角には、アイリッシュガードのブラスバンドが座して待機し、王座の間にＬ字に隣接する大広間も、食後のショーの為に舞台が仮設され、椅子がギッシリと並べられて、小さなシアターに面変わりしている。

ドリンクレセプションは階段を上って右のロングギャラリーで、チャリティーのパトロンである各界の著名人や、陸・海・空の正装に身を固めた現役軍人達も次々に入場して来る。我々芸人は、階段左のゲーム/ビリヤードの間に控え(サンドイッチなどの軽食が用意されている)各々の出番を待つ。

次に続く質問が「どんな所で切っているのですか？」で、パーティなどのエンターテイメントとして切っている事を説明して分かって貰うのにもう一苦労する。自分のスタジオを持つ場合は、その費用と立地条件に依って果たして何人のお客様が来てくれるか心配だし、売上の何割かを支払うギャラリーも然りだ。かと言って人の集まる観光地で、直接お代を頂いて切るというのも(警官に追い払われたくなければ、自治体の許可と公衆の場で働く保険が必要）気が進まなかった。幸いかな英国では、パーティに芸人を呼ぶ事が習慣なのと、80 年後期〜90 年代にかけてテレビのゲスト出演や子供向けのレギュラー番

組（紙切りや折り紙の実演と指導)を持てる事が続き、アクターズ・ユニオン=エクィティにも加盟出来て保険もカバーされたから、自然にこちらでの仕事が主になったのである。

パーティでの仕事は普通ドリンクレセプションから始まり、食事中は各コースの合間をコーヒーの済むまでテーブルを回り続け、食後の挨拶やショー（歌手やバンドなど別の芸人が入るが、時には舞台用の紙切りを要請される事もある）が始まるまでの約三時間、合わせて 60 人ぐらいの横顔を切ることが出来る。

総称で、close-up/mix mingle artist と呼ばれ、マジッシャン、似顔絵描き、ジャグラー等の軽業師、クラウンや風船作り、パーティの趣向に合わせた太鼓持ち(俳優が衣装を着込んで演じる)、有名人のそっくりさん、即興詩人、占い師といった様々な芸人が居て、私もその仲間入りをさせて貰っている訳だ。

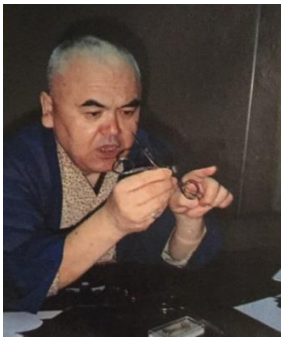
我々の芸を間近でお見せして、お客様に寛いで頂くのが目的なので、自分の芸の切磋琢磨は勿論だが、親しみ易い明るい雰囲気を身に付ける事と、レセプションでは、パーティ慣れしていない為に緊張しているお客様を、いち早く見つける感。食事の最中は給仕のウェイター/ウェイトレスやソムリエの邪魔にならぬよう、常に彼等の位置を頭に置き、各コースの終わった方から順にアプローチする気配りが必要だ。

又、会社関係の慰安や接待、或いは個人の祝事（誕生日や結婚披露宴/記念日)、芸能界の授賞式/映画試写会後の打ち上げ、スポーツ界や政財界の祝勝会/懇親会、各々のチャリティーファンド集め、軍隊や社交界の年中行事から王室主催のイベントなどと、パーティの種類や会場となる場所、時間帯によって服装も言葉も使い分け、礼儀正しさと優雅さ、時にはウイットに富んだ会話術も要求される。

幸いにも私は、東京でグラフィックデザイン基礎科とイラストレーション研究コースの勉強中に、美容部員という接待業の経験（化粧品の知識や使用テクニックは元より、お客様への応対の仕方、店頭での立ち振る舞い、自分の容姿に責任と自信を持つといった訓練を受けた）があった事と、社交好きな性格も相俟って、すんなりとこの仕事に入って行く事が出来た。又この時期に英会話が少々出来たので、外国のお客様の応対を任されていたのも凄く役に立っている。

チャリティーの名誉会長である、アン王女様ご夫妻のパレス到着が、ファンファーレと共に知らされると、お客様はティールームへ移動する。全員が着席して落ち着いたら音楽の間のブラスバンドが、軽やかなグレンミラーのスイングジャズを演奏し始め、我々クロースアップ芸人の登場だ(今年はマジッシャン８人、シルエット切り２人、似顔絵描き４人と、チャーリー・チャップリンのクラウンが１人)。これから二時間かけて、タップリの紅茶と耳を切り落としたサンドイッチに様々な甘いお菓子が、白い手袋を着用した初々しいカデット(兵士の卵)の手によってサービスされ、楽しい談笑のひと時となる。

程良い頃合いになってから、ご主人のエスコートでアン王女様が会場に入って来られ、王座の間から順にゆっくりと全てのテーブルを訪問なさり、負傷した兵士にお声を掛けて回られる。これはその家族にとっても至福の瞬間、元軍人のご主人が先行して合図をくれるので、我々芸人は邪魔にならぬよう、速やかにテーブルから身を引くのも課せられた使命である。



肝心の「シルエット切りは何処で勉強されたのですか?」という質問には、出来れば「何某師匠に付いて何年修業しました」と答えたいところだが、本当は“Discovered by accident”である。

父母の手先の器用さをモロに受け継いだと言うか、随分と小さい頃から絵を描くのが得意だった。周りの人は「この子は絵で身を立てるべきだ」などと勝手なことを言い、本人も親も全くその気になっていたふしがある。それから、紙を切ったり折ったりして遊ぶのも大好きで、テレビなどで紙切り芸を見たりすると、さっそく真似て試してみなくてはならない性分だったそうだ。

グラフィックデザイナーとして広告代理店で働きながら、フリーでイラストレーターの仕事をしていた 84 年に、和紙の染色と江戸千代紙や友禅紙のデザインの仕事に惹かれ、染め紙の老舗 “湯島の小林” (創業 1858 年/安政５年)に縁あって転職。この時に和紙の染め職人をして

いた故・桂文楽 師匠や、紙切りの林家正楽 師匠に出会い、紙切り芸の知識（使用する紙や鋏などを含む)を深める事が出来た。そして “東京の文化探究”といった類の、観光案内書に紹介された店でもあったので、海外からの訪問客が絶えず、ここでも案内をする社長付きの通訳役を仰せつかい、夫と知り合う事になる。

この年、東京ディズニーランドがオープン。友人も誘って遊びに行き、土産物コーナーでシルエットを切っているのを発見、美術史上だけの物ではなく現存しているという事を知って驚いた。立ち止まって見惚れている内に、惜しむらくはアメリカから派遣されて来たアーティストが、西洋人の顔を切り続けて来たせいか、座っている日本人の顔が切れていないのに気付いた。それをコッソリ指摘した私の言葉を受けた未来の夫と友人は、「よし、帰ったらお前さん、試しに俺達の顔を切ってみろ〜っ」と言い出し、「どれっ!」と挑戦してみる事になった。横顔を見ながら切るというのは初めてなので、勿論、今よりも少々時間がかかったけれど、紙切りの経験が役に立ってか、きちんと切り別ける事が出来たのである。

86 年に結婚して渡英、出版関係のイラストレーターとしての仕事は続けているが、幸か不幸か夫がマジッシャンだったので、先ず “紙切り”を英国の芸能界に売り込まれ、以後シルエット切りの経験も積み重ねて今日に至り、今ではこちらがすっかり本業となってしまった。

つつがなくアフタヌーンティーが済んで、クロースアップ芸人のお役も終わりとなる。これから小休憩を挟んだ後、本日のメインである歌謡ショーを楽しむ為に、王座の間のお客様から順に大広間へ移動を開始する。全員が着席し直すまでにはかなりの時間を要するので、この間に我々一同と、ショーの出番を待っている司会者役のコメディアン、ラットパックやアンドリュー・シスターズのトレビュート歌手群、ダンサーなどが、演芸監督の指示に従ってロングギャラリーに一列に並び、ショーはご覧にならないアン王女様ご夫妻の出立をお見送りする。王女様はここでも一人一人に労いの言葉をかけてくださるのだ。

この仕事をしていて一番のやり甲斐は、出来上がったシルエットを手渡した時に、「Oh my God!」と叫ばれ、呆気にとられた驚きの顔や、嬉しさでぱっと広がる笑顔を拝見できること。そして、「You’re brilliant!」「You’re really clever!」などと、こちらが痒くなる程の称賛の言葉を掛けられ、差し上げたシルエットは本当に、大事に大事に持ち帰って頂いて、額に入れて飾って貰えるのだ。

それから、“芸人と乞食は、三日やったら辞められぬ” とはよく言ったもので、年に何回かある舞台での紙切りも、満場の拍手を浴びると本当に嬉しくて感激だ。舞台での紙切りはどうしても日本色が強くなり、場数が限られてしまうから、初めの頃は日本文化を紹介するイベントが主だった。その中では、東京都庁からの依頼で出演したウエストミンスターの QE II センターと、ロンドン・オリンピック開催中のオールド・カウンティホールでの盛況が強く印象に残っている。あとは、マジックサークルのクリスマスショーか（ニューイヤーズ イブを挟んだ八日間、土曜のマチネーも含む長丁場だった)。舞台の前後は気持ちが高揚してしまい、家に帰って床についても演目の一語一句が蘇ってきて、「あそこは、こう言うべきだった、ここはもっとこう…」と反省の繰り返し、なかなか寝付かれなくなるが、マジックサークルのショーでは後にアンケート調査が有り、数ある出し物の中で(珍しさもあって)一番人気に選ばれた時は、小躍りする程嬉しかった。

自分の番が来るまで、アン王女様を横目で伺いながら、『テレビで見る王女様は乗馬されてる事が多く、くせ毛のボサボサ頭で化粧っ気も無い“オバさん”の印象だが、こんな時はキチンとドレスアップされて、間近で拝見するととても綺麗な方だなぁ〜 』などと不謹慎なことを思っている。

それでも初めての時は、自分でも気付かない内に緊張して逆上せてしまったらしく、自分の前に王女様が立たれてちゃんと握手をしてくださり、二言、三言お言葉もいただいた筈なのに、スッポリとその記憶が抜け落ちていた。そして、カータシィと呼ばれる膝を曲げる仕草はキチンと出来ていただろうか？必要以上に下卑た笑いを浮かべていなかったか？ おかしな返答をしなかったろうか？(センテンスの終わりに your royal highness を付けなくてはならない）などと、アレコレ思い悩んだものである。この

パーティはチャリティー団体の恒例行事なので幸にも毎年お声がかかり、この頃はやっと慣れて来て、演芸監督の紹介をキチンと待つ余裕も、スムーズに受け答えする事も出来る様になったけれど、この瞬間はやはり芸人冥利に尽きると言うところか。それでは王女様が間近に来られたので、この辺で失礼させていただきます。

人生１００年時代の医療について

小谷信行

１．はじめに最近医学の進歩もあり、食生活、住環境の改善、衛生状態の改善などで、２００７年に生まれた日本人の子どもたちの半数は１０７歳に達するだろうという推計がアメリカの研究所から発表されています。日本で１００歳を迎えてる人たちは１９８７年２、２７１人だけでしたが、３０年後の２０１７年６７、８２４人と、100 歳が稀ではなくなっています。古希を１０５歳に改めなければならない状態といえます。しかも心身ともに健康である健康寿命がのびています。

専門家が人生１００年時代を考える中で、ロンドンビジネススクール教授のリンダ・グラットン女史はその著書「ライフ・シフト」の中で、教育・仕事・老後という三つのステージで人生を考える時代は終了しつつあり、マルチ・ステージの人生を作り上げる必要があると述べています。

２．子どもの医療はどうなるか

平均寿命がのびている大きな要因に小児医療の進歩があります。未熟児医療、予防接種、栄養意識の高まりなどにより、大きく子どもの死亡率が減り、ほとんど子どもたちは成人に達していきます。ところが人生１００年時代になると体を鍛えて、よく勉強し、レベルの高い教育を受けて、いい就職をして、退職し、楽しい老後という生き方では、いわゆる余生が４０年もあり、生活資金も、こころもとても待ちません。

子どものころから１００年健康である体だけではなく、３つの「無形の資産」を育てる必要があるといわれています。それらを継続的に育てることを支援するのが小児医療の役割だと考えられます。具体的な資産の内容とそれを育てる「成育医療」について解説したいと思います。

３．人生１００年時代の三つの無形資産

１）生産性資産：これはいままで行われていた基本教育です。つまり知識とスキルを蓄えることです。専門的な知識や技術は自分の経済的基盤や社会貢献の上でとても重要でることは間違いありません。ただし今までのように２０歳前後で教育は終了ではなく、３０代、４０代、６０代などにおいて、数年の再教育、つまり知識と技術の再補充の時期が設けられる必要が出てくるでしょう。

現在日本でもヨーロッパでも本格的な就職年齢が３０近くまでなっている若者増えていることもその傾向でしょう。もちろん胎児期を含めた早期教育に重要性は再認識されつつあります。

２）活力資産：１００歳まで生き生きとモチベーションを保つための資産のことです。これは心身の健康、そして家族、パートナー・仲間との良い関係性です。これを養うには自分のアイデンティティ（自尊心）をもち、ソーシャルスキルをみがき、うまく思いを伝える技術をみがくことになります。この資産は胎児期から２歳までに８０％が形成されるといわれていいます。

３）変身資産：１００歳までの長い人生をかんがえるとアイデンティティを変化させる必要は多くなると考えられます。さなぎが蝶々になるように子どもには大きく変身する時期があります。それは２～３歳のイヤイヤ期と１０歳から１５歳のいわゆる思春期です。それでも人生１００年時代になると４０歳代と６０歳代にも変身期がくると思われます。私が外来診療で大勢の子どもさんや大人の方のカウンセリングした経験では４０歳代、６０歳代に大きく変身される方に会ってきました。なやみ・苦しんだ後、まるで悟りが開けたかのごとく違う自分が現れることです。この脳機能の変化は９０歳でも起こるという報告もあります。

では変身資産とはなんでしょうか。まず自分に対する知識です。「己を知る」ことです。自分は完璧ではないことはだれでも意識していますが、具体的な「自分の強み」「自分の弱み」を冷静に認識はし難い面があります。でも変身のためにはしっかり自分に対する認識が必要です。つぎは「多くの人材ネットワーク」です。多職種、多文化の人たちとのネットワークが変身を助けることは想像に難くないところです。ここでも幼児期に作られたコミュニケーション力が大いに役立つと思われます。三番目には「新しい経験に開かれた姿勢」です。これは未知のものに向かってく力とも言えます。これも子供の頃から癖をつけておかないと資産となりません。簡単に言えば、どうしようか、するかしまいか迷った時は必ずする方を選ぶ癖をつけることです。ダメだと思った時のみやめる方を選びます。人の脳は習慣で決定する部分が多いので、変身にとっては微妙なことの積み重ねが大きな変化につながります。そして変化・変身は徐々に起こるのではなく、長い時間の積み重ねが突然大きな変身となって現れます。いわゆる化けるというやつです。子どもたちを診察していると化ける時期がよくわかります。成果が出なくてもこつこつ親子で進んでいる人があるときびっくりするような成長を知ることになります。

４．成育医療

人生１００年時代に必要な資産について述べてきました。だれが何時どこでこれを作っていくのでしょうか。それには継続的な取り組み、介入が必要です。行政でしょうか、教育でしょうか。医療でしょうか。いずれも難しいと思われます。なぜならこれらの資産をつくるためには包括的で結果を見極めることができる長い継続性は必要だからです。行政は非常に優秀ですが、縦割りです。教育もエベルが高いですが、年齢を細切れにして、自分が行った教育の効果があったか否かの最終判定はできません。

そこで登場したのが「成育医療」の概念です。医療機関は全年齢の人を対象に関わることが出来ます。妊娠し受胎したら産婦人科、生まれた後は新生児科、そして小児科、内科などの診療科です。これでは細切れ医療です。これを「成育診療」では妊娠初期から胎児のカルテを作り、情報を一本化して２５歳まで継続支援していきます。中心となる医師がオーケストラの指揮者のように各パートの医師や医療・教育・家庭の子ども取り巻く人たちと支援や治療を関係性と継続性をたもちながら行う医療です。

ここでは、身体の成長と健康も重要視されることは当然ですが、子ども本人の「アイデンティー・自尊心」と「コミュニケーション力」を養うことをもっとも重要視しています。つまり個々に医師・

看護師・臨床心理士・助産師・教師・保育士などのチームができあがり、その情報が共有されていきます。私自身１０年近く愛媛県の松山市で実践を行い、高い評価を受けてきました。

５．The first1000 days
人生１００年時代は特に The first1000 days　and　The last 1000 days が重要になると思われます。The first1000 days は妊娠中胎児期の２７０日と２歳の誕生日までの３６５X２日で、ちょうど１０００日間になります。この時期に脳の機能の８０％が形成されることが分かっています。特に重要なのが胎児期です。アルコールやタバコが大きな影響を与えることは、もちろんですが、母体の食習慣、味の好み、飢餓感、満腹感などにより、生まれた後一生の食生活の基礎が固まると言われています。さらに妊娠中の生の会話の聞く量が多いほど、さらには２歳までに交わす生の言葉の量が多いほど、その後のコミュニケーション力、学習能力が上がることが証明されています。成育医療でほんとうに力を入れて取り組まなければならないのは The first1000 days なのかもしれません。

６．おわりに、ロンドンにきて１年がたちました。医師として、そして医療機関の代表として、「医療通じて、英国と英国に住む日本人のコミュニティーに貢献する」というクリニックの理念をもとに、質の高い GP 医療だけではなく、成育医療や介護やターミナルケアの問題にもとりくみたいという思いを強く持っております。今後も日本人会の皆様をはじめ、いろいろな関係者の方々と連携をたどきながら、クリニック自体が大きく変身できるように無形資産を職員とともに積み上げております。今後ともご支援、ご協力をお願いいたします。

英国春秋つれづれに

春　の　朝（あした）　　ロバート・ブラウニング
上田敏訳「海潮音」より

時は春
日は朝（あした）
朝（あした）は七時
片岡に露みちて
揚雲雀なのりいで
蝸牛枝に這ひ
神、そらに知ろしめす
すべて世はことも無し

英国春秋俳壇

雛子クーパー

春を待つ

寒露の夜宴にぎわす粋な客

冬空や月おぼろにて夕暮れる

聞きわけの良い猫となり寒日和

テムズより汽笛響けり降誕祭

離れては思慕もくすめりひな祭り

春の風邪扱いかねししどけ髪

忌日過ぎ供花眺めて春を待つ

さやけしや君に捧(ささ)げる白い薔薇

夫逝きて二年相合傘恋し

庇(かば)ふもの居るしあわせや復活祭

英国春秋俳壇

俳句同好会

春のうた

木蓮のつぼみふくらみ陽の柔ら　　日出美バンダースケイフ

あわあわと芝生彩る春の雪　　田口邦子

今一度庭に目見(まみ)えよ春の雪　　悦子キング

春の雪狐の親子背伸びする　　藤原栄

春の雪小枝に積みて露と消え　　康子ロケット

春の雪緑の芽吹き遠からじ　　小野宣美

紅梅にきらきら光る春の雪　　川西ひろ子

節分や一人豆まき鬼は外　　福重久子

春の雪草木かすかに薄化粧　　タミー　ガフニー

淡雪がすぐに消えゆく手のひらに　　千津子ウインター

軽やかなメランゲのごと春の雪　　松尾美和子

春の雪芽吹く若木をなでて消え　　岡部道

残雪に陽のまぶしかり蕗のとう　　広瀬信子

曇天が華やぐ気配春の雪　　由美ウィーラー

シドニーでの領事業務とは…

在留邦人 2 万人、年間邦人旅行者 70 万人

竹内　誠治

英国日本人会から，「英国春秋」用の原稿提出依頼がありましたが，何を書かせて頂いたら良いのか逡巡した結果，小生が長年携わってきた領事業務、とりわけ，勤務した在外公館の中で思い出深い豪州の在シドニー総領事館での領事業務を巡る出来事などについて書かせて頂きます。

１　シドニー概観

まず，私は，今から 15 年ほど前の 2003 年 3 月から 2006 年 9 月まで 3 年半の間，豪州の在シドニー総領事館に領事として勤務していました。シドニー市は，豪州最大，最古の都市です。天然の良港で，世界三大美港の一つに数えられているシドニー港は，入り口はほぼ 1.5 キロメートル余りですが，奥行きが深く，直線距離で計っても 16 キロメートル以上あります。湾口からほぼ 8 キロメートルのところに北岸と南岸を結ぶハーバー・ブリッジがあります。その南の付け根のところにシドニー市の中心街があります。湾の南岸と北岸とに住宅地が幅広く広がり，碧い海と白壁, 煉瓦色の屋根,木々の緑とがよい対照をなして，旅行者の目を楽しませてくれます。特に，ハーバー・ブリッジ，それと相対して位置する白い貝殻のような形のオペラハウス，緑の濃い総督府の庭園等，市の中心街のビルから直接見下ろせる景観が，シドニーっ子の自慢となっています。在シドニー総領事館の管轄区域であるシドニー市を中心とする NSW（ニューサウスウェールズ）州には,2 万人以上の日本人の皆様が住んでいました。

オペラハウスとハーバーブリッジ

２　当時のシドニーの治安状況は？

2000 年初頭のシドニーを始めとする豪州への日本人旅行者は年間 70 万人といわれていました。また，ワーキング・ホリデー・ビザで豪州に来る若者は年間約 1 万人いました。これらの旅行者の皆様，若者の半数近くが常時シドニーに滞在しているといわれていました。このように多くの日本人の方が豪州の最大都市シドニーに滞在されていると，事件・事故に遭遇されることもあります。因みに，当時のシドニー総領事館で取り扱う邦人援護の数は，豪州国内ではトップで，全世界的に見ても，毎年，世界中の在外公館の中でベストテンに近い位置にありました。風光明媚で旅行者も多いシドニーで，多くの方が事件・事故が遭遇されていると聞き驚かれる方も多いと思いますが, 今もそれ程状況は変わっていないものと思われます。在外公館では, 邦人の皆様が被害に遭われることを未然に防止するために，在留邦人向け安全マニュアル「生活安全の手引き」を作成し，在外公館の領事部窓口で配布している他，公館のホームページにも掲載していますので, 是非一度目を通して頂き，被害防止に役立てて頂ければ幸甚です。

シドニー湾から中心部を望む

３　豪州国内への食品などの持ち込み規制

豪州国内への食品の持ち込み規制は厳格です。シドニー空港では，1997 年から検疫違反者に対しその場で罰金を徴収する制度（on-the-spot-fines）が導入されていますが，その罰金額が 2002 年 2 月 15 日から従来の 2 倍にあたる 220 豪州ドルまで引き上げられました。シドニー空港での検疫実態は，非常に厳格で，食品などを申告せずに持ち込んだ場合は大部分が X 線検査で発見されると没収された上，罰金を課せられることもあります。食品などを持ち込む場合は，必ず入国時に申告する必要があります。ま

た，豪州ドルで 1 万ドルを超える外貨を持ち込む場合も同様に申告の必要があります。申告せずに持ち込んで，それが発見された場合には没収などの厳しい処罰が科せられることがあります。そのような処分を受けられた方からの相談，援護要請が総領事館に寄せられますが，在外公館でも如何ともし難いのが実状でした。

４　思い出深い事例

ある日，日本人の方が子供の出生届のために来館されました。子供は 4 月 1 日に生まれましたが，届出を失念していたため，窓口で相談を受けた時点で，既に出生後 3 ヵ月以上が経過しておりました。両親共豪州の永住権を取得しているため，子供は出生により日本国籍と豪州国籍を取得していましたが，二重に国籍を取得する海外出生子として，日本国籍の留保届をしなければならなかったところを，うっかりその届出期間（3 ヵ月）を過ぎてしまったため、日本国籍を失ってしまっている状況でした。申請に訪れた母親は切々とその心情を訴え続けられましたが，残念ながら，出生届を総領事館で受理する事はできず，日本に出生を届出したいという両親の願いに応えてあげることはできませんでした。今でも，頭の片隅に残っている事例です。

５　英国日本人会の皆様へ

人口約 400 万を数えるオーストラリア随一の大都市シドニー。英国調の街並みとモダンな高層ビル、緑まばゆい広々とした公園，テラコッタ屋根のお洒落な住宅，そして入江を行き交うフェリーやクルーズ船……こうした景観が見事な調和を見せる美しい街です。 英国がオーストラリアに植民地を置いて最初にできた街がシドニーで，歴史的建造物も数多くあります。特に開拓民が最初にクワを入れたロックスや，ニューサウスウエールズ植民地の行政府が置かれたシティなど、街を歩き，建物を見ているだけで，時折タイムスリップしたような感覚を味わうはずです。 シドニーはまた，グルメ，ショッピングにもこたえられない街です。オーストラリア全土から，ありとあらゆる食材が集まり，世界的にも著名なシェフたちが見事な料理を味わわせてくれます。また欧米の DC ブランドのブティックはもちろん，オーストラリアンデザイナーのブティックも数多い。週末には市内各地でフリーマーケットも開かれます。 都市としての魅力だけではなく，シドニーは郊外にあるオーストラリア有数の観光地への起点ともなっています。世界自然遺産のブルーマウンテンズ，イルカ，クジラが見られるポートスティーブンス，ワインの里ハンターバレーなどは日帰りから 1 泊 2 日のエクスカーションにピッタリです。 さあ，英国日本人会の皆さんも，機会があればシドニーにお出かけになり，街を楽しみ，小旅行を満喫しては如何でしょうか。

以下に，シドニーとその近郊の主な観光スポットをご紹介します。

世界遺産エアーズロック

ブルーマウンテン、キングステーブルランド
世界遺産

ジェノランケーブ鍾乳洞とブルーマウンテン＋
キングステーブルと野生のカンガルー探検

ＩＥＣポートスティーブンス

シドニー・オペラ
オペラシアター、コンサートホール、ドラマシアター等
４つの劇場を持つシドニーのアイコン

ハーバーブッリジ

古い洋服かけ“Old Coat Hanger”の愛称を持つ
このブリッジは、１９２０～３０年代の不況対策の
公共事業として建設された

シドニータワー

地上２６０ｍの展望台と４０シネマがある
展望台からシドニーハーバーの海岸線、晴れれば
ブルーマウンテンズまで見渡せます

ピョンチャンオリンピックを見ながら考えた

渡邉道英

久々、ミッドナイトに BBCTV から流れるピョンチャンオリンピックの映像に見入ってしまった。
日本人の活躍に民族の熱き血の燃えるのを感じた。一方、同じ民族が分断され韓国と北朝鮮が生まれ、敵対している。そんな両国が統一チームを組み、頑張っていたが、俄仕立ての政治ショーに正直ウンザリもした。

ギリシャはアテネで生まれた古代オリンピックは対立する各都市が、オリンピック期間だけは休戦協定をして競技に臨み、スポーツや芸術を競って平和のシンボルとしたと学んできた。ほぼ１０００年の後、１９世紀末のパリ大学ソルボンヌ大学でフランスの男爵ピエール・ド・クーベルタンが古代ギリシャのオリンピアの祭典をもとにして世界的なスポーツ大会を開催することを提唱し、決議された。

近代オリンピックと MUCH　WENLOCK
近代オリンピックを提唱したクーベルタン男爵は、英国の地方都市 Much Wenlock に出かけ毎年開催されている Olympian Cames(1850 年ウイリアム・ペニー・ブルックス医師によって創始)を見学。１８９６年アテネ（ギリシャ）で第一回オリンピックが開催されたとの事。
大変な興味を持って私は、LONDON オリンピック開催（2012）が決まった頃、話題になったこの小さな都市『MUCH　WENLOCK』へ、英国の友人たちと出かけた。

折から「第１５６回 Olympic Games」が開催されていた。小さな町全体が手づくりの Olympic 会場であった。公民館のプールで競泳競技が、併設された体育館ではフェンシングが行われていた。一歩外に出ると、トラック競技がたけなわで、リレー競技に湧いていた。もちろん地元ばかりか、英国全土はもとよりヨーロッパ各地から選手が参加していて、国際的な大会であった。
第一次、第二次世界大戦などやむなく中止の年もあった。其れでも、160 年余も毎年開催されているとのこと。長閑な Shropshire town で日がな１日過ごした思い出は忘れることができません。英国の友が、日本人が訪ねて来たと紹介してくれ、パブレストランに集まった皆さん方がビールで乾杯してくれた。健康的で、フレンドリーな sportsman 達に囲まれて、楽しいひと時を過ごすことができた。人類の素晴らしさを感じ取った瞬間でした。

『オリンピック』という名称は、ゼウスの神殿のあったオリンポス（Olympia）の名前を冠しており、この地で古代オリンピックが開催されたことから命名された。
クーベルタンの提唱により、第一回オリンピックを１８９６年ギリシャ王国アテネで開催することになったが、資金集めに苦労し、会期も１０日間と短かったが、バルカン半島の小国の一つという国際的地位をいっそう向上させたいというギリシャ王国の協力もあり大成功に終わった。しかし１９００年のパリ大会、１９０４年のセントルイス大会は同時期に開催された万国博覧会の附属大会に成り下がってしまい、賞金付きの競技（1900）、キセルマラソンの発覚（1904）など大会運営にも不手際が目立った。１８９８年のロンドン大会、１９１２年のストックホルム大会から本来のオリンピック大会としての体制が整いだした。１９０８年のロンドン大会ではマラソンの走行距離は４２.195 ㎞であったが、これが１９４２年パリ大会以降固定され採用されている。この時期には古代オリンピックに倣いスポーツ部門と芸術部門の二つの競技会が開催されており、クーベルタンも１９００年のパリ大会で芸術部門で金メダルを獲得している。

オリンピック・ムーブメントと嘉納治五郎
日本がオリンピック・ムーブメントに関わるようになったのは、およそ１００年前である。それは嘉納治五郎が 1909 年に国際オリンピック委員会（IOC）委員に日本人として初めて就任してからであった。嘉納治五郎というとご存知『講道館柔道』を創始した人物である。講道館柔道とは、日本に昔から存在していた柔術の各流派をまとめ、青少年の教育のためにつくられたものである。当時の嘉納治五郎は、

柔道のみならず、東京高等師範学校（後の東京教育大学、筑波大学）の校長（２５年間）も務め、水泳や長距離走、さらにはテニスやサッカーなど各種のスポーツを学生たちに行わせるほど、体育に熱心な教育者であった。さらに 1896 年からは中国からの留学生を積極的に受け入れ、彼らにも体育やスポーツ、そして柔道を教えていた。留学生の受け入れは、1909 年までに約 7000 人にも上った。それは、体育は身体を強くするだけでなく、自他共に道徳的に高めることができ、さらに生涯続けることで、心身ともに若々しく活動し、幸福に生きることが出来ると嘉納治五郎は考えていたからです。この考えは、年齢、性別はもちろん、国境も関係なかった。嘉納治五郎は誰もが出来る運動として、徒歩、長距離走、水泳、そして柔道を挙げていた。さらに、柔道や体育活動で得た道徳的な価値が、社会生活でも実践されるべきと考えていた。

近代オリンピックの創設者で、当時 IOC 会長であったクーベルタンは、スポーツによる教育改革に熱心な人物つまり嘉納治五郎のような人物を仲間に加えることを求めていた。嘉納は、駐日フランス大使ジェラールからオリンピックの理念を聞き、IOC 委員への就任を引き受けたが、それは嘉納の考えとオリンピックの理念とが合致したからであった。嘉納治五郎は IOC 委員に就任してからオリンピック・ムーブメントに積極的に関わっていった。スウェーデン・オリンピック委員会の要請に応えて、1912 年の第５回オリンピック競技大会に日本選手を参加させる準備を行う。オリンピック選手を派遣する為の組織として、大日本体育協会（現在の日本体育協会）を創設し選手の予選会を実施。短距離競争の三島弥彦とマラソンの金栗四三の２名を日本代表選手に選んだ。しかし、東京師範学校の生徒であった金栗には、ストックホルムまで渡航する経済的な余裕はなかった、すると嘉納治五郎は高等師範学校で金栗の後援会を結成し、募金を呼びかけ資金を工面したのであった。

アマチュアイズムと商業主義・プロ化

第二次世界大戦が終結し、１９４８年ロンドンオリンピックが再開されたが、敗戦国の日本とドイツは招待されなかった。また１９４８年のロンドン大会から芸術部門が廃止され、スポーツ部門のみとなった。これによりオリンピックは「古代ギリシャの権威を身にまとった世界屈指の国際的なスポーツ競技大会」としての性格を確立することになった。１９５２年のヘルシンキ大会よりソビエット連邦が初参加し、オリンピックは名実ともに「世界の大会」と呼ばれ、同時に東西冷戦を象徴する場となりアメリカとソ連のメダル争いが話題となった。だが、二つの中国（中国と台湾）問題、ドイツ問題（東西ドイツ）など新たな問題点も浮かび上がってきた。そして航空機の発達により欧米のみに限られていたオリンピック開催地を世界に広める結果となり、はじめての南半球での開催となる１９５６年メルボルン大会（オーストラリア）初めてのアジアでの開催となる１９６４年の東京大会（日本）とヨーロッパと北米以外の新たな地域からの開催地が仲間入りした。一方オリンピックが世界的大イベントに成長するに従って政治に左右されるようになって、１９６８年のメキシコ大会での黒人差別を訴える場と化し、１９７２年のミュンヘン大会ではアラブのゲリラによるイスラエル選手に対するテロ事件が起きた。１９８０年モスクワ大会ではソ連のアフガニスタン侵攻に反発したアメリカ・西ドイツ・日本などの西側諸国が相次いでボイコット。１９８４年ロサンゼルス大会では東ヨーロッパ諸国が報復ボイコットをし、参加したのはルーマニアのみだった。

他方、オリンピックが巨大化することに従って財政負担の増大が大きな問題となり１９７６年夏季大会では大幅な赤字を出して、立候補都市が１～２都市だけという状態が続いた。これを覆したのが１９８４年のロスアンゼルス大会であった。大会組織委員長に就任したピーター・ユベロスの指揮のもとオリンピックをショービジネス化、結果としては２億１５００万ドルの黒字を計上した。この流れからプロ選手の参加を促し、古代オリンピックから守ってきたアマチュアイズムは１９７４年のウイーンで開催された第７５回 IOC 総会で、オリンピック憲章からアマチュア条項を削除してしまった。

現在『大英博物館』で見られる円盤投げのギリシャ彫刻、ギリシャ陶器に描かれているマラソンランナーやレスリング選手の極めて美しいフォルムに感動する人は多いいと思いますが、あの裸体像は神に捧げる為の汚れのなさと鍛え抜かれた人体美であったと言う。もちろん女性は参加できなかったという古代オリンピックは絶大な名誉は与えられるものの、「月桂樹の冠」と副賞として貰った「動物の肉」を頂くシンプルな形は現代の私どもの思考態度に反省を求めているように思えて仕方がない。

英国春秋あれこれ

もう一つ日本の誇れるもの、大塚国際美術館

四国の鳴門と云えば、まず思い浮かぶのが渦潮、そして好物ホカホカの鳴門金時、その後はえーっと、えーっと・・・であったのが、今は真っ先に“大塚国際美術館”が踊り出る。この美術館は四国とは言わず日本全国でも、まずは筆頭の名所に挙げたいと私は思っている。
四国の旅から帰阪する前に、鳴門の渦潮見物でもが大雨の為、急遽、大塚国際美術館に変更。何だかよく知らないがニセモノの名画か飾ってある・・・とのいい加減な前知識で訪れたが、まず展示室No.1に入って度肝をぬかれた。ここはまさにバチカンのシスティーナ・チャペルの原寸通りの再現である。大きな違いは、ここでは「写真は撮るな！」「静粛に！」との声が２～３分おきに流れてくることもなく、ましてや見物客で立錐の余地もないほど込み合ってもおらず、自由に歩き回れる空間があることだ。しかしこれは徐の口でこれから先、「モナ・リザ」、「ヴィーナスの誕生」、「最後の晩餐」、「ゲルニカ」、「大睡蓮」、「ヒマワリ」、「夜警」、「アテネの学堂」、「真珠の耳飾りの少女」と、原画に忠実な色彩と大きで再現されたのが、これでもかこれでもかと限りなく現れて来る。ルーヴル、ウフィツィ、メトロポリタン、プラド、ウイーン、ナショナル・ギャラリー、ベルリン、オルセー、エルミタージュ他の美術館の名画が一堂に会することは、たとえ期間限定展示会でもまずありえない。いや今、世界の美術館と書いたが、壁画のあるスクロヴェーニ礼拝堂、聖テオドール聖堂そしてポンペイの秘儀の間ほかが驚くなかれ、実に忠実に再現されているのにはさらにびっくり、まさに驚嘆の極みと言っても言い過ぎではない。という事で私が長々と書くよりも、同美術館の案内書より２～３か所抜粋して下記にご紹介したい。

“世界初の陶板名画美術館:古代壁画から世界25ヶ国190余の美術館が所蔵する現代絵画まで至宝の西洋名画を原寸大で1,000余点”　また聞きなれぬ“陶板”の説明は

“～2,000年たっても色あせない、忠実に再現された名画～　陶板名画とは大塚オーミ陶業株式会社の特殊技術により陶器の大きな板に原画に忠実な色彩・大きさで作品を再現したものです。紙やキャンバス、土壁に比べ色が経年劣化せず、また大きさも原寸大に再現されているため、実際の名画を見るがごとくの迫力や臨場感を味わうことが出来ます”

と説明されている。が“原画の如し”とは実際に見てみないと中々信じられないかもしれない。しかし日本最新のテクノロジーを駆使して、原画→転写紙に印刷→陶板に転写→焼成の後、職人の手仕事で、作者の筆遣いなどの再現のリタッチが行われ、そしてさらに焼成が繰り返されると言う念の入れ方。完成品はキャンバスの布目、絵の具の古さや厚み等迄正確に再現されて鑑賞者の目を騙す（？）のは朝飯前の様子であった。ルーヴルに飾られている「モナ・リザ」の絵を実際に触れて見られた方があるだろうか。ウフィツィの「ヴィーナスの誕生」の貝殻の凹凸を手で確かめてみられたことがあるだろか。ここではそれらが全て可能であった。ミラノのサンタ・マリア・デッレ・グラツイェにあるダ・ヴィンチの「最後の晩餐」の壁画は、部屋の左側の壁に“修復前”、右側に“修復後”掲げられているので、その違いまで知ることが出来た。訪れる機会の少ないコルマールのウンターリンデン美術館のイーゼンハイムの祭壇画も含まれ、壮絶極まる磔刑のキリストの画の前で暫く釘付けになってしまった。

また、館内の展示方法もユニークで、「環境展示」、「系統展示」（古代・中世・ルネッサンス・バロック・近代・現代）、「テーマ展示」（空間表現・だまし絵・時・生と死・運命の女・家族等）に分けられているので、非常に見やすくなっている。
左：幻の「ヒマワリ」（ヴァン・ゴッホ）オリジナルは1945年芦屋市で焼失

『英国春秋』　２０１８年春号（No 32）

編集人　小川のり子
発行人　佐野圭作
発行所　英国日本人会
事務局　c/o JEIB
3 London Wall Buildings
London EC2M 5PD
原稿の送り先　ogawa@japanassociation.org.uk or
Mrs M Hodgson 492 Canterbury Way, Herts SG1 4ED